

法政大学とともに歩んだ43年

OGATA, Ken / 尾形, 憲

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

61

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

313

(終了ページ / End Page)

379

(発行年 / Year)

1994-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008577>

【ノート】

法政大学とともに歩んだ 43 年

尾 形 憲

はじめに

私と法政大学との縁は、1951年の1月通信教育で経済学部経済学科の3年に編入したときにはじまる。それから43年だから、私の70年の人生の大半が法政とともにあったわけだ。

1984年から経済学部は多摩に移ったが、市民講座・法政平和大学を主宰した関係もあり、家に書斎などない私の仕事の本拠は今日までずっと市ヶ谷にあった。週に6日か時には7日、朝から晩までのサラリーマン教師である。そこで43年通い続けた外濠公園の土手道の話からはじめよう。（「神田川を考える会」No. 49, 1990. 12 所収に加筆）

今年も桜の季節がやってきた。外濠公園の土手の桜も今年で44回になる。コンクリートジャングルの都心にあって、外濠の水と桜並木は、毎日見なれたものであっても、何か心に安らぎを覚えさせてくれるものがある。

最近桜が満開となるのは大学の入学式がある4月3日前後だが、時には暖冬異変のため3月24日の卒業式の日にはほぼ満開となり、おかげで夜桜の下での追い出しコンパとなった年もあった。

だが、昭和のはじめまでは立入禁止で、いかめしい鉄柵がはりめぐらされていたそうだ。そして、「この土手に登るべからず警視庁」という川柳もどきの高札が立っていて、法政の学生と三輪田学園の前の交番からとび

出したおまわりさんが追っかけっこしたという話もある。法政から市ヶ谷駅へ行く土手道の入り口には、右から左へという昔の横書きで、「東京市外濠公園」と書いてある。戦災で焼けなかったのだ。

明治、日大、昔の中央など、都心のほかの大学には庭らしいものはあまりない。法政にとって、この外濠公園は事実上キャンパスの延長の庭として貴重な役割をはたしている。

東京に住むようになってから、9回住所を変えているが、以前はずっと西寄りだったので、市ヶ谷からの道だった。それが4年前の4月からダサイタマとの境の清瀬に移ったので、西武線で池袋へ出て地下鉄有楽町線で飯田橋からということになった。どちらも桜並木の道であることに変わりはないが、市ヶ谷寄りの方が桜の花はきれいなような気がする。どっち側も、桜の季節には昼のうちから夜のお花見のための席取りで、縄が張りめぐらされ、1人か2人坐りこんでいる。「席とりをしないこと」という区の掲示などは全然ききめがない。

桜の花が散ると、黄色いレンギョウの花が咲く。そしてタンポポ、ツツジである。青葉の季節になると、桜の木から路上に毛虫が落ち、夏になるとにぎやかな蟬時雨となる。

この道は今ほだいたい舗装されているが、昔は土のままだった。もう40歳をこえる上の息子が小さいころ、よく研究室へ来たものだったが、チョコチョコとこの道を小走りにやってきて転んだりしても、膝に土がつくだけですんだ。今ではもうそうはゆかない。地下水が少なくなって桜もどうなっていくか気がかりだが、それでも雨のあとなど、ミミズが路上を這っていることもある。

土手道の下を外濠沿いにJRの線路が走っている。かなりの落差がある。1969年のバリケードストライキの年、全共闘に追いかけられた民青の学生が誤ってこの土手道から落ちて死んだことがあった。それまで柵も何もなかったのが、無粋な柵がつくられ、それもつくり替える度毎に嚴重なものになっている。

市ヶ谷から通っていたころ、故安井郁さんから原水禁運動の苦労話を聞きながら歩いたことがある。さきごろ亡くなられた第1教養部の平井豊一さんと歩いたことも思い出す。冬など空気が澄んでいるときは、富士山がよく見えた。大学の所在地は「千代田区富士見」である。だが、いつのころからか覚えていないが、濠向こうに高層建築ができたため、見えなくなってしまった。

それでも濠に釣人が糸を垂れている風景は昔も今も変わらない。寒くなるとちょっと見かけなくなるが、飯田橋寄りのお濠には、ボートもよく見られた。市ヶ谷駅に近い所にはブランコや砂場もあり、天気の良い日はよく若いお母さんが子どもを遊ばせている。40年たっても、庶民のささやかな憩いの場は失われていない。

憩いの場といえば、土手道のベンチには、昔も今も、夜アベックの姿が何組か見受けられる。法政というところは、昔は門も柵もない大学として知られており、キャンパスの市ヶ谷寄りの一角に「法政大学」と大書した柱が1本立っているだけだった。そのため、夏などアベックさんたちが入りこんで、芝生の上で“風紀を乱す”ことがあったらしい。それでたしか1963年に高さ1メートル位の形ばかりの柵ができた。その7年後、中核と革マルの内ゲバに端を発した殺人事件のため、この柵は高さ3メートルの鉄柵にとって代られることになる。一昨年撤去された柵である。

ぼくは大学で教育経済論という講義をもっていたが、その前期の最後の授業で、いつもバリスタの69年と鉄柵のできた70年という2年間のことを生涯忘れられない大学の歴史の一コマとして話している（後述）。また同じ授業のなかで、東京が年々暑くなって、桜が鹿児島より早く咲くようになったこと、こうした温暖化を和げてくれるのが水と緑であること、市ヶ谷からでも飯田橋からでも、夏法政に来るときは土手道を歩いた方がその下の舗装道を歩くよりハッキリわかるほど涼しいこと、を話している。

去年の秋はベンチの上でホームレスの人たちが寝ているのが目につい

た。今までなかったことだ。青森で1町4反の田から米1粒もとれない冷夏、それになべ底不況とあらためて思い知らされた。法政をやめても、43年歩いた外濠公園のさまざまな思い出は私の脳裡に生き続けるだろう。

通教生のころ

私はいわゆる戦中派、それも陸軍士官学校を出た元職業軍人である。敗戦後のどん底生活のなかで、琢木ではないが、「働けど楽にならざり」の資本主義の矛盾を身にしみて痛感した。そのころ読んだ河上肇の『第二貧乏物語』が縁で経済学に興味をもつようになり、東京へ出てきたのが、1950年の暮れである。マルキシズムに興味を持ちはじめているが、51年の正月宮城に参賀に行った覚えがある。

はじめは早稲田のⅡ部へでもと、当時の「進学適性検査」など少しは受験準備もしていたのだが、知る人もなく、仕事にもありつけないまま、準備してきた僅かばかりの学費も生活費に消えてしまった。そこへ目についたのが、法政の通信教育である。そのころ通教の事務局は、本校の焼跡に道路に面して建てられたバラックの2階に間借りしていた。授業料は年間4,100円だった。陸士卒が旧制高校卒扱いとなって3年編入、教養課目は免除で、前年の10月に遡っての入学である。

〔昭和〕23年度後期という経済学部通教の第1期生となったはいいが、外国語経済学、経済原論……とつぎつぎ送られてくるテキストはさっぱり理解できない。レポートを出そうにも、どう書いていいかわからないし、貧乏ぐらしでは参考書なども買えない。杉本栄一の『近代経済学の解明』（上・下、理論社、1951）ぐらいなものだったか。何とかレポートをでっち上げて出すと、「テキストの丸うつしはいけません」とコテンコテンの評がつけられて返ってくる。学部みたいに年に2度でなく、もっと頻繁に科目別終末試験がある。レポートを四つ出してOKだと受けられるから、試験間際にテキストを読んで大急ぎで書くと、受験勉強も兼ねられるわけ

である。

仕事探しは職安と新聞広告を頼りにするよりない。職安は飯田橋、芝園橋、渋谷、新宿など、片っ端から廻り歩いた。最初ありついた仕事は T 済生会のレントゲン技師、あの「息を吸って、とめて、ガチャン」というやつである。ここは明治天皇の御下賜金ではじめられたとかで、都内にいくつか診療所があって、生活保護の人たちを対象としている。医者も看護婦も年寄りばかりで、色気のないことおびただしい。日暮里、羽田、立川と各診療所をそれぞれ週に 2 日ずつ廻り歩くことになった。

ところが、給料がはじめの約束と全然違う。文句を言ったら、前に勤めていた郷里の病院に問い合わせが行ったのを父が知らせてよこしてくれた。「アカじゃないか」というのである。そのうち「働き心地が悪いのならやめた方がいいんじゃないか」という。クビというわけである。組合は御用組合でとり上げてくれないし、労働基準監督署や労政事務所へ行っても、全然埒があかない。大内兵衛総長の名前を思い出して、大学にも行ったが、だめだった。

つぎの仕事は新橋にある Japan Industrial Press という英字新聞の外交員である。固定給はべらぼうに安い。広告の注文を沢山とってくれば歩合給でかせげるが、新入りはそうはいかない。裏の雨戸があかず、国電ストップの 2 月の大雪で苦労したりで、ここは 1 カ月ももたなかった。

レントゲン技師、無線技師、それに英語が少しは得手だから翻訳の仕事と、三つかけて探したが、なかなか見つからない。越中島の進駐軍の仕事はあやしいと敬遠して、やっとゆきついたのが T 興信所の外国部、外勤の人が信用調査してきたのを英語に訳す仕事である。私の外に慶応ボーイが 1 人と外語大出が 1 人。部長は 80 をこえたおじいさんで、私たちの訳したのをおそろしく古くさい英語に直す。外国部のすぐ隣にあった何とか部の部長は社長の息子だが、1 日何もしないで、机の上に足をあげて新聞を広げている。昼の食事はうどんの方がそばより腹がふくれるような気がしていつも 10 円のうどんかけ、汁は余したことがなかった。

興信所は新富町だったから、昼休みには3人でよく銀座をぶらついたが、いつもきまって話すことは、この中の誰がもっといい給料のところを見つけてやめていくだろうかということとじいさんの悪口である。

妻は近所の佃煮の工場へ出ていた。干鱈の皮むきで、1匹12銭5厘。1日朝から晩までやって、家にまで持ってきてやっても1,000枚で125円である。家じゅう干鱈臭くなった。私も日曜日など行ったが、こちらは円筒形の金網の籠に大豆を入れて炭火の上で廻しながら煎る仕事である。どちらも朝鮮戦争の前線への携帯口糧だそうだ。

7月に子どもが生まれた。それで休んだら、月末に大入袋としてくれる500円が出なかった。英字新聞で「送受信機の経験ある技術者を求む」というのを見て、早速会社で履歴書をタイプした。タイプを叩いていると仕事をしているように見える。相手はAeronautical Radio Inc. (ARINC) ^{エアリンク} というところ。パンアメリカンやノースウエストなどの航空会社が出資してつくった子会社で、羽田とグアムやアンカレッジなどの飛行場間、それから対飛行機の通信をする。卑屈な思いをしながら若いチームに一生懸命採用を頼みこんだ記憶がある。しかし、心配したほどでなく、川崎にある送信所勤務ということになり、とたんに給料ははね上がった。興信所にやめる届けをしに行ったら、「やはり技術を持っていると違うなあ」と、仲間の2人の羨しがることといったらなかった。

生活も安定したし、日勤・夜勤・明け・休みという勤務だから、翌年の4月からのスクーリングにも、だいたい大学へ行ける時間がとれるようになった。夜勤のときなども、機械の故障などなければかなり本も読める。

ただし、そのころは通教特設のスクーリングはなく、昼や夜の授業で学部学生と一緒にということになった。課目は統計学、経済原論二部、財政学、経済学史のほか、全部単位にならなかったが、大学での勉強は何といてもゼミナールだろうと思って、四つもとった。大島清先生の農業論、宇佐美誠次郎先生の財政学、迫間真治郎先生の近代経済学、中野正先生の経済原論である。このうち中野先生のはたしかP. スイージーの本を

読んでいたが、二言目には「ショーベン法」ならぬ「弁証法」である。夏休み前ころとうとう音をあげてズラかった。あとで大学院を終わって助手になったとき、教授会の歓迎会で中野先生は私の前に座っていて、「君は昔ぼくのゼミから逃げ出したことがあったな」と言われた。よく覚えてやがんなと消耗した記憶がある。

迫間先生のゼミはケインズの『雇用、利子および貨幣に関する一般理論』である。はじめはどうせやるなら原書でやるという沓水勇先生のを希望したのだが、小学生の時『資本論』を読んだという沓水先生は、今の学生でゼミをいくつもとれるのはいないはずと、他のゼミをとるのを認めなかったで、迫間先生のにした。もっとも、自分で読むのは原書である。参考書にした D. ディラード『J. M. ケインズの経済学』（岡本好弘訳、紀伊國屋書店、1950）はわかりやすかった。

どのゼミも、希望者はみんなはいれ、それでもせいぜい 10 人足らずである。ただ迫間先生のは近経、それも訳でのケインズということで、人数が多かった。

当時は、今ある 62 年館、58 年館、55 年館はもちろん、大学院（53 年館）もまだできていない。2 階の木造三棟、新館（今の守衛所の裏の 4 階でこの 1 階に大内兵衛総長の室があった）、今のピロッチェの前の六角校舎、唯一つ今も残っている第一校舎（この 4 階に図書館があった）、平屋の第 2 講堂、これが教室だけでなく、事務室、研究室その他のすべてだった。その中の一つで下に学生ホールを兼ねた 65 番、2 階に 66 番、67 番という教室があり、そんな室で今の 511 や 835 といった大教室でやるような必修の授業をやっていた。学生数は今より少なかったし、1、2 年次は当時まだ川崎に居た（58 年館ができて全部こちらに移る）にしても、恐ろしく悪い出席率の上に授業が成り立っていたに違いない。夜勤の明けの日などは実に眠かった。いつも一番前でコクリコクリだから、先生方にはずいぶん目ざわりだったろう。

六角校舎の地下にはいつも満員の食堂、本屋（政文堂。生協はまだな

かった)、床屋、靴屋、カメラ屋などがあつた。

何といつても、ゼミが思い出深い。迫間先生は三木清の妹が奥さんで、昔はマルクス経済学だったのが、①価値論に疑問を持ったこと、②独ソ不可侵条約、③敗戦のときのソ連の火事泥、が契機となって近代経済学に転向したという。ちょうど自衛隊の前身の警察予備隊がつくられたところで、私にも、元職業軍人ということで今まで官公職・教職追放で食うや食わずにしておいて、追放令解除と同時に、入隊して幹部になってくれませんか、官舎もありますよ、給料もいいですよ、とお誘いがかかっていた。そのころは向坂逸郎さんの再軍備反対の本なども読むようになり、警察予備隊など入るもんかと思っていた。そんなものだから、迫間先生が再軍備賛成の文化人の声明に賛同されたときも、アメリカが海の向こうからはるばる日本を助けに来るもんかと、旧職業軍人時代の戦略論をふりかざして真向から反撃したこともあつた。他のゼミ生たちがみな近経的な考え方に立っている中で、私1人口角泡をとばして生かじりの労働価値説でケインズを批判したりするのだから、先生もだいふ手こずつたのではないかと思う。

大島先生のゼミではとくにノミナルの真価を知つた。いつか浅草へストリップを見に行こうという話になつたが、残念ながら実現しなかつた。

宇佐美先生のゼミでとくに記憶にあるのは、鈴木徹三さんがあの小さい体でセカセカと入つてきて宇佐美先生に耳うちをすると、「みんなちょっとテキストを読んでいて下さい」と言つて出ていかれたことである。ちょうどその年、血のメーデーで、法政の近藤巨士君が警官に撲殺され、その校内葬が大学当局の反対を押し切つて強行された。その校内葬に焼香した教授たちと、その姿を六角校舎から写真をとつていた教授たちと、経済学部教授会が真二つに割れていたころである。またこの少し前にはレッドパージ反対闘争で、今は社会学部と第二教養部の教授のSさんやEさんが学生自治会の責任者としてクビになり、この闘争に賛同した経済学部の3人の教授が大内総長の意を受けた友岡久雄学部長の下で解職されるとい

う事件があった。こうした事情をよく知らぬ私たちにも、いかにも物情騒然たるそのころの世情がうかがわれた。

ともかく大学は、とくにゼミは、楽しかった。経済史のテキストの中に“Stadtluft macht frei.”（「都市の空気は人間を自由にする」）という言葉があったが、当時の私にとってはまさしく“Schuleluft macht frei.”（「学校の空気は人間を自由にする」）だった。

資本主義の矛盾を解き明かす鍵として、右も左もわからぬままマル経と近経と両方やってみたわけである。イギリスの労働党がケインズ政策を支持して「社会主義というのは必ずしも産業の国有化ではない。人々が幸福になればいいのだ」というのを讀んだりして、一時非常にケインズに惹かれたこともあった。

だが、「自由放任の終焉」で国家という救いの神を持ち出すケインズにあって、公共投資は生産力を上げるようなものであってはならない。生産力が有効需要に対して高すぎるから不況になっているのだ。不生産的な公共投資の例として、たとえば、壺にお札をつめこんで廃坑に捨てる。いっぱいになったところで掘ったりかえす。その仕事自身は無意味なものであっても、それで失業者が賃金をもらい、今まで買えなかった消費財が買われ、生産財部門も息を吹きかえす。そうしたきっかけになる。戦争や地震でさえ、あるいは昔のピラミッドも、そういう役割を果たすだろう。

ディラードは、こうはいても、ケインズはけっして戦争を奨励しているのではないといっているが、1930年代の大不況からいちばん早く立ち直ったのが軍備拡張にいち早くのり出したドイツと日本であること、ニューディール政策を懸命にやったアメリカが1943年、太平洋戦争がはじまって2年後になってやっと大恐慌前の失業率に戻ったことは、象徴的である。

しかし、公共投資のための財源が税金だけでは足りず、赤字国債にも依存するようになると、当然インフレとなり、必ず国際収支は天井にぶつかると。結局ケインズ政策は一時のごまかしではないかと思うように

なった。

資本論研究会というグループがあって鈴木さんをチューターとしてやっていたのに参加したが、これは途中でつぶれてしまった。『資本論』をはじめから読んでみようと思ったところに卒論である。『資本論』は副題が「経済学批判」となっており、スミスやリカードの古典派経済学の批判の上に立って書かれている。卒論の課題のなかに久留間鮫造先生の「アダム・スミスの分業論」があった。これをテーマにして書こうと思い立った。

ところが、どういうことをどういうぐあいに書いていいかまるっきりわからない。そこで経済学史の授業のあと、先生に尋ねたところ、『資本論』第1巻の第12章を読んでみろとおっしゃる。「分業とマニファクチュア」の章である。この章に先立つ第11章は「協業」であり、どちらも第4篇「相対的剰余価値の生産」のなかの章である。そして、第10章は篇全体の序論の「相対的剰余価値の概念」となっている。そこで第10章を読んだところ、「社会的価値」と「個別的価値」という奇妙な文句にぶつかった。おかしい、資本論研究会で第1巻のほんの最初の方しか読んでないが、そこには価値は「現存の社会的・標準的な生産諸条件と労働の熟練および強度の社会的な平均度」での労働時間で測られるとあるではないか。価値というのはもともと社会的なものなのに、ここに来て「社会的価値」と「個別的価値」とは何事か。

次の経済学史の授業のあと、久留間先生に聞いたところ、「それは学界でも大問題になっている問題だから、一度うちへ来なさい。ゆっくり話してあげよう」という。わからないはずだ。そこである日午後から吉祥寺にある先生のお宅へおうかがいすることになった。

原書と対照しながらいろいろ説明して下さったが、何しろ理論の手ほどきの部分も満足にわかっていなかった私である。何やら幼稚な質問を連発して先生もだいぶ手を焼いたようだ。そのうち「まあ、あわてないで、一杯飲みながらやろう」と杯を持ってこられた。杯を傾げるうちに、話は私の仕事の無線のことから、学問の話、さては人生論にまで及んだ。私は先

生がテスターやハンダごてなどラジオ道具一式持っていて、ご自分の電蓄にあれこれ手を加えられたりする学者離れした腕前に驚いた。とうとう延々 6 時間半、うどんだったか、夕飯までご馳走になって、先生のお宅を辞したのは、もう 8 時だった。

いろんなお話のなかで、一番感銘深く、今でも折にふれて学生に話していることが二つある。一つは問題意識というか、何のために学問するのか目的をはっきりさせること、もう一つはどんな「偉い」人の言うことでも納得しないまま受け入れないこと、いつも疑いを持たねばならないこと、である。

そのころは西荻窪で戦争中航空軍司令官閣下だった S さんの応接間を間借りしていたから、川崎の送信所へ行くのに新宿と品川で乗りかえ、川崎駅からはトロリーバスである。電車の中で前日のことをあれこれ思い浮かべ、「何という偉い先生だろう」と陶然としていたら、品川で乗り越しそうになり、あわてて降りて京浜東北線に乗ったはいいが、さて、手に持っていたはずの小さな鞆を、降りる人ごみにもまれて落としてしまったらしいのにはじめて気がついた、というようなのぼせかただった。これが私の学問との出会いだったわけである。

そのつぎ先生のお宅をお伺いするとき、ご馳走になった酒が「恋鹿」という名前だったのを思い出して、方々の酒屋で恋鹿の特級を探したが、どこにもない。吉祥寺のでいりの酒屋で聞いたら、恋鹿は合成酒だという。大学の教授って安月給で合成しか飲めないのかと思った覚えがある。たしかにそのころの法政の給料は都内でもどん尻クラスだったらしい。

卒論は提出の当日の朝までかかって書き上げた。400 字 40 枚ぐらいだったろうか。学部では一年間まったく出席しなくとも、友達のノートをコピーしての一夜漬けでも単位がとれるが、通教は各科目ごと出席に代る 4 回のレポートがある。おまけに卒論と卒論の面接があり、英語の面接まである。卒論の面接は久留間先生のほかにもう 1 人、1 年間顔なじみになった大島先生だった。

殺人罪でも15年、40年前だからもう時効だろう。実は私は通教を裏口から卒業しているのである。通信でとった科目は前に言ったようなレポートの状況だから、優よりも良が多く、可もあった（そのころは「優・良・可・不可」の4段階だった）のはしょうがない。実はドイツ語が1単位足りなかったのである。編入の時は教養科目は免除といっておきながら、スクーリングをとる段になって、陸士では外国語はあまりやらなかったろうからドイツ語を2単位とれと言ってきた。年度はじめ授業に出てみたら、当時通教局長をやっていたO先生で^{アーベーツェー}ABCからである。こんな授業に出てもしょうがない、年度末に一度出席して試験を受ければいだろうと、ずっとすっぱかしていた。ところが、前期が終わったところで1単位分試験をやったのである。それを知らないでいて、1単位不足で卒業できないということになりそうになった。そのころ、今立教の教授をしている久留間先生の息子さんか横浜国大の学生だったのに、先生はドイツ語の手ほどきを『資本論』の原書でなさっていた。それに参加させてもらったので、先生はおそらく「この男はドイツ語はとともよくできる男だ」とも話してくれたのだろう。私は無事に卒業することができた。

スクーリングでの諸先生方との出会い、とくに久留間先生との出会いは、私に学問のきびしさと同時に面白さを教えてくれた。もっと勉強してみたいと、私は大学院をめざすことになる。

3年かけた大学院

大学院受験の日は夜勤の明けである。川崎の海岸から法政までだいぶかかる。日勤はいつもおそく来る人なので、前以て頼んでおいたが、相変わらずなかなか来なくて、いらいらした記憶がある。

面接で、「仕事を持っているようだが、勉強と両立するか」と聞かれた。「5年くらいかけるつもり」と答えたら、「マスターコースは2年の倍の4年までだ」と言われた。

入学が 1953 年だが、ちょうど前年講和条約が発効して、今まで ARINC がやっていた仕事は運輸省の航空局が引き継ぐことになった。大島先生が久留間先生に「尾形君は私たちよりいい給料だそうですよ」と言っていたとかいう給料も半減とあって、ARINC から残ったのは私 1 人だった。そのため、4 月からは送信所の責任者になって、ローテーションから外され、日中出なくてならない。久留間先生の授業が金曜日なので、その日は休ませてもらい、代りに日曜出勤となった。これからが本番の勉強だと、学生服を買って、着ていった。

送信所の送信機は 4 台、対空無線の Voice, アンカレッジ, シェミア向けのモールの North, 沖縄, 台北向けのモールの South, グアム向けのテレタイプである。オートチューン・システムといって、羽田の通信所でダイヤルすれば、コイルやコンデンサーが変動して送信周波数が切り変わるといふものである。ARINC の時もそうだったが、アンテナがよく盗難に遭った。高いところへ上がって切っていくのである。夜半に停電になって予備電源に切り換え、調べたら 3,300 ボルトの送電線が切られていたこともある。よほどのプロにちがいない。

この送信所仲間は、家族づれで向ヶ丘遊園地へ行ったり、夏は江ノ島で泳いだりした。あの人たちは今どうしているかしら。

大学院の授業では、大内兵衛さんなどもいたが、金曜日以外の授業は聴けなかった。Y 先生は、院生が報告すると、きまってコクリコクリなさっていた。Y 先生は学生にボッカさせて（荷物を背負わせて）よく山へいらっしやると聞いていた。その疲れが出るのだろうか。

院生仲間には、今の日本女子大の人間科学部長一番ヶ瀬康子さん、埼玉大学名誉教授の暉峻淑子さん、社会学部の鷺見友好さん、第 2 教養部の遠藤茂雄さん、経営学部の中込世雄さん、経済学部の原薫さん、もう亡くなったが社会学部の齊藤博孝さん、早逝された山室得弘さんなど、錚々たる顔ぶれがいた。昼休みに鷺見さん、遠藤さんとはよくヘボ将棋を指したものだ。暉峻さんとは大学院のロビーで価値論の議論をしたり、友岡先生

の『資本論』第3巻第5篇（利子生み資本）の原書での授業が理事室でただ1人だというので、ご一緒したりした。伊豆の巢雲山、那須など、院生仲間はちょいちょい一緒にハイキングに出かけたが、そのときは我が家の1人息子がついて行って、人気者になった。

財政学をやっていた金鳳起さん（もう1人いた金さんと区別して「ラージ金さん」）は久留間先生が夏軽井沢の別荘へ行かれるときよく自動車を送り迎えられ、あとで早稲田の近くに焼肉屋「香気苑」を開いたのによく行ったものだ。金さんはあとで平滑筋芽腫という珍しい病気で亡くなった。

大学院の2年目の暮れのことである。前年完成したばかりの、“Hotel University”と見間違えられたとかいう“Hosei University”のネオンで名を売った大学院の建物の上から、「美しい校舎のかげに教職員は飢える」という長い垂れ幕がぶら下げられ、道ゆく人々を驚かせた。この年の5月結成された教職員組合が、ボーナス闘争でスト権を背景に闘ったときのこと、総長室前にはテントが張られ、10日間にわたる座りこみも行なわれた。今度一緒に法政をやめる日高普さんが助手で、院生をオルグに来られたのを覚えている。

通教時代『資本論』ははじめの方をちょっと読んだだけだったので、大学院に入って本腰入れて読みはじめた。どうせ読むなら原書でと、アドラツキー版をナウカ社で出した紙の悪いのだが、「ここで原稿が断絶している。エンゲルス」まで1年半かかった。修士論文は久留間先生に近づきになったきっかけの「社会的価値・個別的価値」の問題を含め、競争論にとり組むことにした。

はじめは大学院を終えたら、郷里へ帰ってラジオ屋でもやろうと思っていた。だが、人間の欲というものはきりのないもので、学問が面白くなると、もっとやってみたくなった。助手を受けてみたらと勧めてくれたのは大島先生だったか。

法政の経済学部は戦後早い時期から助手の公募をしている。大学によっては、有力な長老教授が教授会で子飼いの弟子を強力に推薦して採用とい

う「^{インブリーディング}純粋培養」のところもだいぶある。そういう所に比べると、法政の経済などは公募で入るのだから、教授会のメンバーになっても、誰に気がねをすることもなく発言するし、学問的にも誰の指図もうけない。30代、40代がいちばん物をいうし、50代や60代は棚上げという“下剋上”が法政の“自由にして進歩的”な気風となっている。その代り、早い時期はどうしても東大卒が多く、大宅壮一に「東大の植民地」などと言われたこともあった。久留間先生は校友から「先生方は東大卒だから東大の学生の方がかわいいんでしょう」と言われ、憤然として、「見知らぬ東大生と今教えている法政の学生と、どちらがかわいいかわかりましたことでしょうか」と言い返したという。

助手を受けるための論文は修士論文でということになる。なまはんかなものでは合格できっこない。そこで1年のばした大学院の3年目に仕事をやめた。退職金で一家3人、1年間食いつないで助手を受けるという背水の陣である。受からなかったら、また職安廻りということになる。商品が貨幣になれるかなれないか、マルクスのいう「命がけの飛躍」である。面接のとき、中野先生をすごい見幕で睨みつけていたとか、大島先生には私が「家に火をつける」と言ったとか、いろんな伝説があるが、ともかくこの「命がけの飛躍」は成功した。

大学院の1年目は通教時代の成績の悪さを思って奨学金の申請はしなかったが、助手を受けようと思い立った2年目申請を出した。ただ困ったのは、最近2ヵ年の成績をつけて出すというので、スクーリングのときのと大学院1年のもと思ったら、通教のは3、4年一緒にしてしか出せないという。それでも久留間先生が何かうまいことでも書いてくれたのか、2年のときだけ奨学金を受けることができた。

助手時代

研究助手は3年間、この間無償で博士課程を修めることになる。何しろ

助手の給料は「教員養成費」という名目で、月額1万3,000円、航空局時代のまた半分である。それも3年間据えおきだから、もちろん学費など出せるはずもない。週に一度大原社会問題研究所の所長をなさっていた久留間先生のお室で原書（Grundrisse だったかしら）を読む。仲間に仙台出身、社会学部の石垣今朝吉さんがいた。3年かけて論文を書いて、審査の結果 OK なら専任講師、ダメならクビということになる。いうならば試用期間みたいなものだから、給料も安くて3年間据えおきということらしい。

助手の研究室というのははじめはなくて、経済学部長室があてられた。あとで第一校舎の一室があてがわれたが、今58年館のある所は当時まだ靖国神社の敷地で、能楽堂の「ヤッ、ポン、ポン」という鼓の音が窓から入ってきたりした。私と一緒に助手になったのは、今東北大学にいる徳永重良さんとあとで一橋大学に移ってもう故人となった良知力さんである。

助手の仕事として、毎月寄贈や購入の雑誌の論文リストづくりがある。だが、教壇に立ってしまえば、マスプロ授業に忙殺されることになるので、この3年は研究に専念できる実に貴重な期間である。そこでこのリストづくりを学部のアルバイトでやってもらうことはできないかと考えた。財源はある。学部の機関誌『経済志林』の金である。当時の学部長の渡辺佐平さんからは、助手時代はいろんな資料に目を通すことが大事だといわれたりしたが、結局アルバイトを頼んでやってもらうことになった。この第1号のKさんはあとで良知さんと結ばれることになる。

何しろ安月給だから、いやおうなしにアルバイトをせざるをえない。あとで法政の教職員組合の役員をしたとき、「法政大学残酷物語」シリーズの「助手の巻」で書いているが、早速思いついたのは大学の診療所のレントゲン技師である。毎週1回水曜日にやることになり、月3,000円だった。

昔の中学の英語の先生「まむし」さんが大久保の新宿予備校の校長をしていることを知った。早速行って答案の添削のアルバイトをお願いした。

1枚5円である。

学年末には試験監督をやった。上記の「残酷物語」によると、1時間150円、1日フルに朝から夜までやって $150 \times 9 = 1,350$ 円。入試の方が割がよくて、朝8時半～午後3時で1,000円ちょっとに昼食がつく。だが、カンニングする奴はいないかと監視監督する仕事だから、あまり体のいい仕事ではない。

「ことに511番とか835番とか大部屋は苦勞する。体育会の学生などは固まってチームワークよろしくゴソゴソやっていて、そばへ行くとピタリとやめ、遠のくと又はじめる。

おまけに答案を提出して先に出たやつがテキストを見て扉の外から『株式会社は……!!』と大声でどなって、パッと人ごみへ姿をくらすといたてあいもある。全く始末が悪い。挙動不審なやつをそばにずっと立っていたら、ナイフをグサッと机に突立て、ジロリとこっちを見上げた学生が昔いたとか。嚴重にやったため試験が終わってから学生にとりかこまれ、教室へつれこまれた例もある。こうなると試験監督も危険手当がいる。そうでなくとも、エキストラの試験監督の人たちは大体OBが多いので、『あまりうるさくいわずとも…』と、かなりひどいのも見逃されるケースが多い。毎年教授会でやり玉に上る処分学生は氷山のほんの一角というところ。」

法学部の下森定さんなどもこのころの助手仲間だったが、組合の忘年会で「牧師と奴れい」の替え歌を助手仲間て腕をくんで歌ったことがある。

「へ理事たちが うまそうに 御馳走を食べるとき
 助手たちは うどんかけ そこでやつらはネコなで声で
 おまち もうすぐだ 専任講師になる日がかかる
 おまち もうすぐだ その時はBランチへ

「このごろの忘年会はいつも息子が一緒によくクジびきの役にひっぱり出されていたが、この歌がすっかり気に入って、帰りに「理事たちがうまそうに……」とくりかえし歌っていた。オヤジの苦勞も知らないで……。

こんななかでも、『資本論』、『剰余価値学説史』（亀の子文字のやつ）、『経済学批判要綱』など、マルクス・エンゲルスものを繰り返し読んでノートをとった。久留間先生は「恐慌」とか「競争」とか項目ごとにカードをつくっておられたが、私はタイプもないから、カードをつくる代りに本に見出しをつけた。『直接的生産過程の諸結果』の原本が一橋大学にあることを聞いて、良知さんに借りてもらい、何日かかったか覚えてないが、133ページのものを全部タイプで叩いたことがある。コピーしたのを一部久留間先生に差し上げた。今のコピー機を思うと夢のようだ。

『剰余価値学説史』はマルクスが書いた原稿にカウツキーが勝手に順序を変えたり、手を入れたりしたということで、ソ連のマルクス・エンゲルス・レーニン研究所で編集し直した版がこのごろ出た。出たのはいいが、けしからんことにロシア語版が先である。仕方がない、『ロシア語4週間』を買ってきて勉強をはじめるとともに、学部のロシア語の授業に出させてもらった。『4週間』は半分くらいまでしか行かなかったが、『学説史』は辞書を引きながら何とか読めるようになり、助手修了論文「利潤率の傾向的低下について」に利用できた。

助手時代で忘れられないのは資本論研究会とのかかわりである。私は大学院のころからここのチューターをしており、3人のチューターが2年生から4年生まで持ち上がりでやる。いまでもつきあいが続いているのは、助手の3年目から担当して60年安保の次の年卒業していった組である。よく山へ行ったが、はじめての私は女子学生にリュックの紐の結び方を教わったりした。週1回だが半日みっちり、3年がかりでともかくも『資本論』全3巻、二千何百ページかを読み終えたときの喜びは、今もテープに残っている。

この連中は10人ぐらいだが、夜間部や通教から移ったとか、高校は定時制で就職の経験もあるとか、まともなコースでないのがほとんどで、しりすぼみが多い研究会やサークルのなかで最後までやった。法政の教職員組合の仕事をやっていた職員のYさんもこれに加わった。部室は第一校

舎の4階にあった。土曜日はアコーディオンのうまいのをつれてきて、そのころ「うたごえ酒場」や「うたごえ喫茶」ではやりのロシア民謡を片っぱしからやった。

学生たちは全員東京周辺に就職したので、卒業しても「OB研」をやろうということになった。理論のつぎは日本経済の現状分析をと、月1回日曜日にやった。そのうち、知らぬは先生ばかりなりで、在学中研究会のなかでチャンとできていたカップルを手はじめに、つぎつぎゴールインした。お互いにだんだん忙しい身になり、5~6人の集まりでも毎月は無理と、数ヶ月に一度となった。そして場所も報告者の家でまわりもち、報告者が関心をもっている問題をやることになった。鉄鋼連盟にいるI君が富士・八幡の合併をやれば、労金にいるN君は金融再編成をという具合である。白熱した論議のあとはビールを傾けることになるが、みんなそちらの方が楽しみらしい。箱根の健保の寮に家族づれ30数人で泊ったこともある。

卒業後N電気に入ったT君は、2年後惜しまれるのをふり切ってやめ、10年間Tk大学の司書をしながらかツツ勉強して司法試験に合格、今中央線のM駅の近くで弁護士をしている。夜警などしながら大学院を終えたS君はRs大学の教授、常務理事もつとめた。昨年3月ゼミの同窓会ときは足立区で塾をやっているH君、鉄鋼会社にいるK君なども含めみんな来てくれた。OB研はしばらく途絶えているが、又あらためてみんな飲んでみたい。

教員となって(1)

1959年4月、私は専任講師になった。この3年後助教授、さらにその6年後教授になった。10年目に教授というしきたりである。

教授会のメンバーになったわけだが、専任講師はオブザーバーみたいなもので、議決権はない。そのくせ書記をやらせられる。専任講師に議決権がないのは、その後改められ、専任講師という制度自体もなくなった。

専任講師になってまもない1961年、入学者の手続き率が予想を大きく上回って、予定より1,200人もよけいに入学してしまった。そこであわてて夏休みに作ったのが62年館である。ただしこのころすでに都心では教室はつくれないことになっていたので、研究室名儀である。そのため、地下の食堂は本格的なものではできず、軽食だけとなっている。

大学の教員というのは教育、研究、管理運営、社会奉仕という四つの仕事を持っている。そこで、後でまとめて書いた1969-70年のバリストからロックアウトの年と1974-75年の学部長時代を除いて、この順にふりかえてみよう。

はじめに教育。専任講師の初年度は講義はもたず、クラス授業の外国語経済学だけを七つだか八つだか持たされた。私の1年後の渡辺寛さん（現東北大学）は12コマである。2年目から経済学演習（ゼミナール）、3年目から講義ということになる。このころの学生数は経済学科だけで、1学年2,000人近く、今の倍以上である。原論で昼夜のほか法学部の原論ももったりすると、答案枚数が4,300枚という例もあった。

外国語経済学というのは、スミスとかりカードとか、横文字で経済学をやるわけだが、学生はだいたい語学が苦手なので、関係代名詞がどうか、そのitは何をさすかとか、経済外国語になってしまう場合が多い。読ませると、labourをラバー、walkがワークで、workがウォークとくる。この外国語経済学は3年と4年、どちらも必修である。このごろ私は採点が非常にきびしくて、私のだけで卒業できないというのが大量に出たため、教授室で学生たちにとりかこまれ、渡辺学部長に救出(?)されたことがある。結局大量落第は困るとて、採点訂正になった。

法政の学生の名誉のために言っておくが、できない学生ばかりではない。マルクスの“Value, Price and Profit”（『賃金、価格および利潤』、いわゆる「チンカリ」）を使ったときだったか、現在神奈川県知事の長洲一二さんの訳に誤りがあると指摘した学生がいて、長洲さんにそのことを知らせたら、ていねいなお礼の返事を頂いたことがある。

講義ははじめは久留間先生の『経済学史』をテキストにした夜の経済学史の授業である。そのうち貨幣論をやるようになった。1 時限目、夜の 5 時半からの授業だが、仕事を持っている学生にとっては 5 時半というのはたいへんきつい。ある程度そろうのは、今でもそうだが、まあ、6 時ごろである。3 時限目も終りは 9 時 40 分だが、バスがなくなるというので、9 時をすぎると、中座してゆく学生が多いから、まともに授業できるのは 2 時限目だけだ。1 時限目のときははじめ 30 分ぐらいは前おきに雑談をやることにした。

たとえば国鉄や私鉄の「二段バネ」。このごろ私鉄が値上げし、西武線の場合キロ当り 2 円 50 銭が 2 円 65 銭になった。とたんに富士見台～桜台間 (3.1 k) が 10 円から 20 円に、池袋～豊島園間 (7.1 k) が 20 円から 30 円になった。2 円 65 銭 \times 3.1 = 8 円 21 銭、切り上げても 10 円なはずである。2 円 65 銭 \times 7.1 = 18 円 81 銭、こっちも切り上げても 20 円だ。調べてみたら 3.1 k と 7.1 k がまずそれぞれ切り上げられて 4 k と 8 k になり、2 円 65 銭 \times 4 = 10 円 60 銭 \rightarrow 20 円、2 円 65 銭 \times 8 = 21 円 20 銭 \rightarrow 30 円というわけである。これは国鉄も同様である。

井の頭線や東横線の電車に「T. K. K.」と書いてあるのは「東京急行株式会社」ではなくて、「とてもこんでこまる」ところがこのごろは「とてもこんでころされる」だから私鉄ではなくて死鉄、そういえば国鉄も酷鉄……。

戦後まもないころ、国鉄に 63 型電車というのがあった。燃えやすい塗料が塗ってあり、車輦間の通路はなく、窓は出入りできないよう枠があった。1951 年桜木町でパンタグラフのスパークで電車が燃え上がったが、逃げようのない客が 100 人ほど焼死した。以来ドアの傍に「非常の際は下のコックを手前に引くと、ドアが手であけられます」という貼り札が貼られるようになった。

1962 年には常磐線の三河島で事故があった。そのころの常磐線は貨物も電車も列車も一緒にこの辺は高架である。下りの貨物列車がポイント故

障のため車止めに乗り上げて下り線路上に横転したところへ後の列車がやってきて止まった。乗客がコックでドアをあけてゾロゾロ上りの線路へ降りたところへ上りの列車がやってきて、160人の死者を出した。それからドアの傍の貼り札がもう1枚ふえた。「線路に降りる時には特に他の列車にご注意下さい」万事、後手後手で、抜本的な対策は何一つとられず、死んだ人は帰ってこない。

年末に授業の感想を書かせると、「本番の授業よりも前座の方が面白い」というのが多い。大学の授業ってそんなものだろう。

1963年に教職員組合の役員をやったのがきっかけとなって、私学問題に関心をもちはじめた。それで短期間労働経済論、67年からは教育経済論をやらせてもらった。はじめ「大学論」のつもりだったが、経済学部だから「教育経済論」の方がいいだろうということになったらしい。おそろくこの大学にもないだろう。

きっかけがきっかけだけに、大急ぎでつくった上下2冊のテキストはだいたい私立大学論である。だが大学、とくに私立大学は小・中・高の教育の吹きだまりといってよい。いやおうなしに高校以前の教育にも視野を拡げざるをえなくなった。それに伴ない、講義もさまざまな教育問題を日本資本主義のひずみの投影としてとらえる内容となった。

ただ講義で「教育の荒廃」と借りもので見てきたような何とかをしゃべっても、あまりパンチがきかない。そこで1977年度からは、教育の現場で悪戦苦闘している教師や親、生徒などに来て話をしてもらうことにした。その反響はすさまじいものがあつた。ゲスト＝1日外来講師の人たちのお話とこれに対する学生の感想などについては、私の『学びへの旅立ち―マスプロ授業を超えて―』（時事通信社、1981）、『素顔の学生たち―学びとの出会い―』（青木書店、1983）、『もうひとつの学校―遠山塾高校から水俣大学まで―』（有斐閣、1986）などを見て頂きたいが、ここでは最近の事例を二つだけ紹介しておこう。

はじめは1990年のⅡ部の授業で、高野生さんである。高野さんは中学

中退、15歳でアフリカへ一人旅をした。タンザニアとケニアに1年、マラリアで寝たり、泥棒に身ぐるみ残らず持っていかれたりした。「日本にいる時は教師と学校が悪いと思っていたが、タンザニアの同年の少女にそういったら、『学校に通えるだけいいじゃない』と言われ、自分がどんなに甘えていたかわかった」帰国後、大手出版社の誘いで十代だけで作る月刊誌を創刊し編集長となった。87年に全共闘の実態を知りたいと、北朝鮮に密航し、日本赤軍の田宮高麿に会った。さらに89年の総選挙で社会党候補の運動員をし、政治の世界をかいま見る。話をしてくれたとき25歳。すでに5冊の本を出している。

「私は自民党指示だから、社会党には鳥ハダが立つ」というのもあったが、大半の学生の感想は肯定的だった。「自分の気持ちに素直に生きる生き方に驚いた」「何を学ぶかという考えも特に持たず、大学生になった自分が恥ずかしい」「オレは演劇に生きる。一緒にがんばろう!」「曲りくねった人生大賛成!! おれはまだまだ守りには入らない。今から大きく曲ってやろうと思っている。大学入学時には考えていなかった目標(夢)がある。プロのミュージシャンになることだ。『大学を出たのに』とか『就職しなければ駄目だ』なんて言葉には耳をかさない。高野さん、お互いがんばりましょう」

84年にI部が多摩に移ってからは、とくに4年の出席率が決定的に悪くなった。評価はAかDだから、Aが7~8割ぐらいになる。おまけに年間2回のレポートで、ペーパーテストなしだから、「おいしい」課目ということになっているらしい。登録は1,000人をこえるのに、実際の出席は2~30人、時には1ヶタである。そんなところにわざわざ遠くから来てもらっても失礼と、ゲストは法政自主夜間中学のスタッフと生徒のおばちゃんということが多くなった。その分は映画やビデオで補っている。例年南京大虐殺、焼きつくし奪いつくし殺つくす三光作戦、生体実験の3部作の映画「侵略」、夜間中学の記録映画「うどん学校」、原爆アニメ「おこりじぞう」、朝鮮人原爆被爆者を対象とした「世界の人へ」、障害者の自

立を描いた「みちことオーサ」、それに今年はビデオ「はだしのゲンⅡ」である。

これらの映画などへの反応については、私の書いた前記の本を見られたいが、中にはゼミ生でも「世界の人へ」に「50年も前のことを今さらほじくり出さなくてもいいじゃないか」、「みちことオーサ」に「自立といってもやはり介助が要るじゃないか」というものもある。

法政自主夜中は私のゼミ生が中心になって8年あまり前開校したものである。毎週土曜日夜6時から9時まで、大学の空いた教室を借りてやっている。生徒は20人位、圧倒的に60歳から70歳をこえる朝鮮人の女性である。小さいとき強制的にかだまされて連れてこられ、日本語はいやおうなしに話せるようになったが、仮名も漢字も読めない、書けないままこの年になった。孫に手紙の一つも書いてやりたい、今どんなことが起こっているか新聞の社会面で知りたいたと、それこそ孫みたいな学生たちに「あいうえお」からはじまって教わっている。「ずっと来てたおかげで、前はひとに書いてもらっていた名前を、市役所などで自分で書けるようになった」と目を輝かせて語る彼女ら。親と教師に尻を叩かれて勉強させられてきた学生たちは、学ぶ意味、学ぶ喜びを教わる。

勉強のあい間のお茶の時間に、おばちゃんたちは苦しかった生活のことをポツリポツリ話してくれる。「生まれてはじめて覚えた漢字は『貧乏』という字だよ、アハ……」学生たちは首をひっこめながら、日本帝国主義が朝鮮に何をしたかを目の前の生き証人から教わる。

スタッフはゼミ生のほか、最近は卒業生、一般の社会人が多くなった。なかには赤城山の麓から4~5千円かけてわざわざという人さえあった。

つぎに紹介するのは、90年のⅡ部の授業でスタッフとおばちゃんたちの話を聞いての学生の感想である。

「この授業を履修していませんが、今日夜間中学についての話があると聞いて出席しました。アジアについての歴史をしっかりと学び、日本人の過去の罪というものを改めて認識しようと感じました」

「“学ぶ”ということとは何か、について考えさせられた」

「スタッフの方が語っておられたように、『ボランティアでなく、自分達も学ぶことがある』ということ、これが『学ぶ』ということの原点ではないかと思う。人と出逢って人は成長するということである」

「生き生きしたオモニの方たち、一緒に学んでいるスタッフの方たち、皆さんいい顔してますね。『生』を実感している気がしました」

「私の母と年代代でありながら、あまりにも違う境遇であることに驚きました。ここまで違いがあるのはなぜなのか、教師を志望する私としては追求したいことである。是非一度見学させてもらいたいです」

都の夜間中学研究会で、法政自主夜中の責任者だった女子学生が夜間中学のベテラン教師から手ひどく批判されたことがある。それは、ほかの自主夜中はどこも公立化をめざして運動をやっているが、それをやっていない法政はほかの運動の足をひっぱることになる、公立化を目ざさないのなら、自主夜中という名称を使うべきではない、というのである。そして、週に1回程度では、お遊び半分のサークルだという。彼女はゼミで泣かんばかりにその模様を報告した。

だが、生徒が公立化の要求もしないのに、その頭をとびこして何でもかでも公立化というのが正しいかどうか。かりに、法政のある千代田区に対して公立化の運動をして、区内のどっかの中学に夜間学級ができたなら、まず千代田区外に在住のおばちゃんたちは皆しめ出されてしまうことになる。区内に住んでいるのはただの1人、その1人も別に中卒の免状がほしいなどと言ったことはない。研究会の司会をしていたこれも夜中のベテラン教師である K さんは、司会でなかったらあの批判を徹底的にやっつけてやったのにと、あとで私に電話してくれた。彼がかかっている松戸の自主夜中はずいぶん前から公立化の運動をやっているが、ここの生徒は登校拒否の子どもが大半であるため、公立夜中ができて入れないから、結局併行して自主夜中が必要になるというのである。

ゲストをお呼びすることのほか、私の授業のもう一つの特徴はモグリ奨

励である。これはゼミも同様で、ゼミには66～7年ごろからすでにおり、講義ではゲストをおよびしたそのころからとくに多くなってきた。高野さんをアフリカからの帰国後呼んだときは300人教室がギッシリのうち、アンケートを出したモグリだけでも40人をこえた。北海道で障害者用の椅子をつくっているM君は筑波大学から高野さんの話を聞きにきたのが私との縁のはじまりである。83年の俵萌子さんがゲストのときは宇都宮大学からのモグリがいた。「始発で来てよかった！」信州大学から何度か来たのもいる。

今年の教育経済論は大学での最後の授業になるので、私にとっても学生にとっても思い出の深いものにしたいと、「真に学ぶ意欲のある学生だけに限定する」ことにした。年2回のレポートのほか、毎時間その1週間に読んだ本の内容の要約と感想の提出を求めるといものである。正直なもので、登録は36人、そのうち義務づけた登録時のレポートを出して出席しているのは11人である。このほかに1年生のモグリが2人と40歳をこえた主婦がいる。彼女は横浜で塾をやっており、1時間半かけてくるが、まず休まない。休んだときは必ず、あるときは母が病気で岡山からと、私の自宅に夜電話してくる。こうなると学生証をもっている学生がニセ学生で、ニセ学生がほんものの学生ということになりそうだ。

だいが前郷里の田舎に帰ったときのことだ。義弟の家に寄ったら、彼の中学時代の友だちが来て話していた。どうも法政のことをよく知っているようなので、聞いてみたら、中卒後上京してご多聞にもれず職を転々としたが、その一つが飯田橋駅の近くの「玄来」というラーメン屋だったのだそうだ。

毎日出前で大学へ出入りしていたわけだが、体育関係の部屋などヘラメンを持って行って、翌日どんぶりと金をとりに行ったら、注文した学生は来ていない。居合わせた学生に聞いても、「あいついつ出て来るかしら。今アルバイトしてるからな」という返事、学生というものは毎日大学へ出て来るものと思っていた彼は、すっかりめんくらったらしい。

そのラーメン屋は二階がマージャン荘になっていて、学生たちがしょっちゅうやってくる。入れかわり立ちかわり朝から晩までジャラジャラ、徹夜も珍らしくない。腹がへると下からラーメンを持って来させてツルツルというわけ。いったい大学へいつ行くのだろう、あんなにしておられる大学っていったい何だろうと、彼は不思議でならなかったそうだ。彼は中学までの成績もよかったが、家が貧乏で高校へさえ行けず、中卒ですぐ就職せねばならなかった。そういう学生たちを毎日見ているうち、だんだんしゃくになってきてその店をやめ、間もなく郷里へ帰って以来ずっと駄菓子運ぶ運転手をしているという。

1984年に雑誌『世界』で、私は「大学授業活性化の試み——足もとの教育改革から——」という一文を物したことがある。そこで、上に述べたようなゲストとモグリのことを書いた。ところが、日頃管理されている身分であるためか、大学の職員の1人が「モグリ奨励とはけしからん」と総長に手紙で直訴したのである。総長も困ったらしく、経済学部長へ、学部長から私に注意があった。私は、後で見ると、私が学部長をやった74年に履修要綱でモグリ奨励を書いたのを知らないわけがないだろうと逆ねじを食わせた。あとで総長に廊下で会ったら、「いや、ぼくもモグリを歓迎してるんだ。でも、あまり大きな声で言うなよ」

ゼミは1年おくれてⅡ部もやるようになったが、どちらも私の関心の変化に応じて、理論的なものから教育問題、さらには教育問題も含めた広義の平和—積極的平和へと内容が変わってきた。単に戦争がないというだけでなく、さまざまな差別・抑圧、飢餓・貧困、環境破壊がないことも含めた平和である。できるだけ共同レポートを出させるようにし、68、69、70、72年の4年は、私大問題について手分けしてデータを集め、これをもとにした分析をやらせた。こうして作られたのが「私立大学の研究教育条件」（資料1-1～3）、「私立大学の研究教育条件及び体制」（資料2-1～4）、「私立大学の研究教育条件および財政」（資料3-1～3）、「私立大学の研究教育条件と労働組合」（資料4-1～3）である。

これらの資料には全国の大学の賃金、その他さまざまな研究教育条件が収録されており、72年のものは全国291校の私大のうちその過半数の152大学を対象とすることができた。このため、全国の私大経営者および教職員組合から欲しいという電話や問合せが殺到したばかりか、日本私学振興財団や文部省からも入手したいと申し入れがあった。財団では、行くと「ゼミで今年はどんな問題をやっているのですか」と聞かれたりした。

だが、こうした実績は私がテーマを学生に与え、それを手分けしていれば私の下働きとしてゼミ生が動くわけである。テーマ自体もゼミ生が自分できめるのでなければおかしいと、私は72年を最後に資料づくりをやめる。

76年のI部新ゼミ生は18人、このうちモグリ2人を含め女子が7人である。若い連中はやっかんで、「尾形さんは人畜無害だから女の子が多いんだろう」と失礼なことを言った。男子の方は私大の財政問題をやりたいという。女子の方は女子にとっての高等教育に取り組みたいという。その結果、両方の重なるところ、女子の高等教育の主流となっている私立短大の問題をやることになった。

ところが、私大問題自体が未開拓の分野であるのに加えて、私立短大となるとなおさら研究も少ないし、資料も入手にくい。ゼミ生が文部省の短大担当の課に行きまわった資料がないかと聞いたら、そんなの何もない、尾形ゼミでできたらぜひ欲しいといわれて帰ってきた。私は君たちがやっているのは文部省もやっていないことだとハッパをかけた。

前の大学の資料づくりのときは私が教職員組合や時には大学当局に頼んでデータ集めをしたが、短大は未組織のところが多いし、そのような資料づくりは難しい。そこで、とりあえず既存の資料を手分けして整理し、これを分析しようということになった。

こうして1年あまり、次の年2人のゼミ生がこれに加わってつくり上げたのが『私立短期大学白書—花嫁学校から資格学校をこえて—』である。これは付属資料を含め266ページのタイプ印刷だが、朝日新聞に大々的に取り上げられ、海の向うのコロンビア大学から注文が来る有様である。こ

のあとの私立短大問題の論文はどれもこの白書を援用している。1,500円で頒布したが、古本屋では3,000円、さらに1万円と、文字通り洛陽の紙価を高からしめた。ずいぶん後になっても、この白書が欲しいという希望がかなりあり、仕方なくその都度私の手持ちの1冊をお貸ししてコピーしてもらった。

私のゼミは平均的な法政の学生たちばかりで、けっしてエリート集団でも何でもない。だが、その中心となってゼミをリードしてくれたのはモグリのMさんだった。Mさんは二人の子どもを見るにつけ今の公教育のダメさ加減を痛感して、はじめは地元国立のS大へ聴講願いに行ったのだが、やれゼミはだめだとか、手続きがどうのとかうるさいことばかりで、いやげがさしたところにモグリのことを知ったわけだ。私は手をあげて大歓迎である。

Mさんは1年あまりの白書の作業でも、合宿やノミナルでも、いつもゼミの中心になってくれた。その成果が学界でもマスコミでも注目を集めた白書だったのである。よくモグリは無賃乗車だとか万引きだとかいうアホがいるが、冗談じゃない、私に言わせると「地の塩」で、金にかえられない貴重なものを提供してくれる。こちらから助手手当を払いたいぐらいだ。NHKがモグリの取材に来たが、傑作なのはゼミ室のある69年館の入口の「許可なき部外者の立ち入りを禁ずる」という立て札も放映されたことだ。そのせいかどうか、この立て札はその後なくなった。

モグリのゼミ生は1人1人みんな思い出深い連中ばかりである。私が書いた本に登場した人たちのほか、最近のケースを少し紹介しよう。

文学部のモグリY君は卒業してS女子高の教師になった。「あのスケベエが女子高とは…。半年ぐらいでクビじゃないか」といっていたが、校長とケンカしながら何とかやっている。その教え子でKz大学に入学したNさんは4年間私のゼミにモグっていた。モグリの2代目だが、前に見た筑波大学のM君の奥さんの弟N君も義兄に聞いたとゼミに来た。どちらも法政自主夜中にかかわってくれた。

法学部の M 君は 3, 4 年と 2 年間ゼミにモグっていたが、卒業後もちょいちょい、とくにコンパや合宿という顔をしてくれた。一昨年名古屋に転勤になったが、ゼミ合宿のときはわざわざ来てくれる。もう 15 年ものつきあいになる。彼も夜中にずっとかかっていた。

H さんは横浜に住む目黒の私立女子高の 1 年生である。入学後わずか半年で校則の息苦しさに耐えきれず、高架道路上から飛び下り自殺した。7 月ごろから保坂展人さんの青生舎に出入りしていたが、2 学期になるとほとんど学校へは行かず、私のゼミに出たりしていた。生徒手帖にあるおじぎするときの写真など見せて、校則がいかにも重荷になっているかをゼミで訴えた。「異端派凜華（イタンハリンカ）」—「管理反対」を逆にした新聞を作って「学校の所持品検査に反対する」などとクラスの人たちに呼びかけたが、関心は示しても心を開く生徒はいなかった。

そのころゼミが 2, 3 時限目だったので、昼休みの食堂の混雑をさけるため、2 時限目の授業は 30 分早く終えて、その分 3 時限目を早くはじめていた。生協の食堂で一緒に食事をしたが、彼女がタラコのスパゲティを食べていたのを覚えている。それが 10 月 24 日だった。その前日彼女は中間試験を休んでいる。そしてゼミの日の夜、同じモグリの学生のところへ電話をかけている。その翌日の夜山下埠頭で死体が見つかった。前日の食堂では、そんなことになる気配などさらさらなかったのに……。1985 年のことである。

それからこれも管理のきびしさに抵抗してモグっていた例、ただしこちらは大学生である。横浜線の K 駅の近くの Nb 大の 4 年生 F 君は 1989 年の 1 年だけだが、前期の終わりから 1 日も休まず II 部のゼミに出ていた。そのうち大学が近いこともあって、多摩の I 部にもである。II 部のゼミが夕方の 5 時半からはじまるが、4 時ごろには必ず私の研究室へ来て本を何冊か借りていく。ゼミ生は 1 週間が限度で本を自由に借りられる。もっと早く来ればよかったとボヤクことボヤクこと。

彼の大学は驚いたことに背広だが制服がある。女子はスカート紺無地、

膝下 10 センチ位 (!)。制服、ワイシャツ、ネクタイ、オーバー、靴、靴下、オーバーのボタンに至るまで色に指定がある。この制服でないと、授業に出られないのである。この大学の教職員の指導・監督による会合以外に学内の集会はできない。学生自治会はおろか、生協もない。

つぎに驚いたのは「天長節」という言葉を知っていることである。正月節 (元旦四方拜と三日元始祭)、紀元節 (建国記念日)、菊花節 (11 月 3 日、神嘗祭と新嘗祭をその中間に合わせて)、天長節 (天皇誕生日、4 月 29 日→12 月 23 日) の 4 大節には学内の産土古社に詣でて祭事を行ない、欠席すると全科目から減点される。授業の内容は私が昔陸士時代親しんだ東大教授平泉澄の本など使った皇国史観のものである。

9 月ごろ 3 泊 4 日の学外演習がある。1 年は水戸で藤田東湖などの水戸学、2 年は吉野から京都と南北朝、楠一族について、3 年は山口から出雲、隠岐と吉田松陰、名和長年、後醍醐天皇などについて学ぶもので、予備授業に 1 回も休まず、演習終了後の試験と写真その他の資料を含めた記録の提出でパスしないと、各学年とも必修であるだけに卒業できない。

この大学は法学部だけの単科大学だが、F 君は田舎で東京の法学部に入りたくて、入ってはじめてこういう大学だと知ったそうだ。初年度の学費は 130 万円である。こういう大学だからこそまた私のゼミにモグる気になったのだろう。

彼は卒業後も法政平和大学の通信教育の受講生となり、昨年 3 月のゼミ生同窓会のときは遠い宮崎からわざわざ来てくれた。

Ⅱ 部のモグリのゼミ生が中心になって、韓国へ旅行したグループがいた。むこうで知りあった Y さんが日本に留学に来て、私のゼミにととき顔を出してくれた。彼女はソウルの大学で日本語を専攻し、日本でいうと手塚治虫にあたるような韓国の代表的な漫画家李賢世^{イヒョンセ}の作品『純姫』^{スニ}を日本語に共訳したものを私に贈ってくれた。売春、性差別、労働問題、民主化など、韓国が抱える今日の諸問題をリアルに描いた大人向けの漫画である。

Y さんはゼミで韓国の人たちの対日感情について話してくれた。彼女

が大学で日本語をやりたいというのに、父親は「なんでよりによって日本語か」とかんかんになって怒ったという。喫茶店で友だちと練習も兼ねて日本語で会話していたら、店のおやじさんが「日本語なんて使わないでくれ」と怒声をあげた。こういう年輩の人たちは日本の植民地支配の体験を味わった人たちだが、若い人たちの反日感情も強い。テレビで日本の着物を見て、友だちがきれいだとほめたら、別の友だちが「なんで日本の着物がきれいなどというんだ」と怒りだした。

ピースボートで私もずいぶん体験したことだが、日本がかつて侵略したアジアの人たちの対日感情は、日本の中にいたのでは想像できないようなきびしいものがあって、びっくりすることがある。こういう Y さんのような話は貴重である。

多摩へ移ってからはモグリがずっと少なくなったが、それでも中央とか、創価とか、東京薬科とかいった近くからときどきある。市ヶ谷のⅡ部は相変わらず、93年度のⅡ部ゼミは2/3が他学部、通教、1年生などのモグリで、予備校生までいた。「今ごろこんな所にモグっていたら、来年どこも受からないぞ」とみんなから言われたりした。

モグリばかりあげていたのでは正規の学生がかわいそうだ。こっちでいうと、だいぶ前になるが、障害児教育の問題をやりたいという K 君がいた。「ぼくは門外漢だから指導できないよ」といっても、やりたいという。ほかに何人か加わってやっていた。K 君は卒業してから、訪問学級など、実際障害児教育にかかわっているが、これがきっかけになって、その後ほとんど毎年、障害児教育ないし障害者問題が取組まれるようになった。そして隔離教育派でスパルタ教育をやっても健常者に近づけようとする養護学校とそういうことをせず障害者であって何が悪いと開き直る統合教育派の養護学校の実態調査などしてのみごとなレポートが生まれたりした。

いまだに部落差別の厳存していることを思い知らされたのも、Ⅱ部ゼミの正規の学生からである。彼は郷里が熊本だが、彼のところでは、靴屋と鞆屋の娘はもらうなということになっており、これに背くと身内から村八

分になるというのである。卒業前の春合宿で、彼はそれが自分の問題であることを打ち明けた。ずっとつき合っているのが靴屋の娘だという。被差別部落の人たちがそうした仕事に従事することが多いにしても、逆は必ずしも真ならずで、靴屋だから必ず部落の人ということにはならない。彼の相手の場合もそうだという。それがわかっている、自分は卒業して郷里へ帰ったら、彼女と別れるつもりだと語った。私たちは暗然たらざるをえなかった。

同じ熊本出身で2年、3年とI部ゼミ生のSさん。彼女は老人問題に取り組んでいるが、彼女のお祖母さんが寝たきりで、お母さんが仕事をやめなければならなくなったのがきっかけだという。彼女はいろんな研究や資料を集めるだけでなく、私の方針に忠実にせっせと現場へ行く。亡くなった田尻宗昭さんは昔私に「今の大学では現実とむきあうことで自分の生き方を考える機会が決定的に欠けていますね」と言われたことがある。荒波の朝鮮海峡から東シナ海、硫酸を海に垂れ流しの四日市から六価クロム公害の江戸川区と、現場を経めぐり歩いてきた人だけに、その言葉は重い。

Sさんは昨年夏地元の特別養護老人ホームでの“一日実習生”となった。オムツ交換が1日5回である。24人を3人でやる。岩手のある特養では1日14回、30分おきにチェックというところもあるという。

フトンをはぎ、寝巻をぬがせ、オシメをとる。もうこの段階で顔はしかめ面になる。1人目は小便だけだったが、特有の臭いがツーンと来る。あー、イヤだ、どうしようと思いながら、温いタオルで拭いてあげる。はじめての体験だ。

だが、2人目は大便も。ベッドのまわりは便の臭いでいっぱい。息を止め、なるべく便を見ないように、オムツをとる。臭さでいっぱい、涙がこみあげてきた。何とかタオルで拭いてあげようとしても体が言うことを聞かず、見かねた寮母さんが代りにしてくれた。でも、4、5人目のときはだいぶ神経もおさまり、手伝いできるようになった。

「ところが、もっと、ショックなことがあった。それは、自分の力で便

を出せる人は、なるだけ自力でさせようということで、ある老人がそういった状態でした。4、5日出てないらしく、本人も苦しんでいた。なかなか出ないので、『浣腸をしよう』ということになった。私だって、浣腸ぐらいでは驚かない。問題はそこからである。浣腸をしても出る様子はなく、私は他人ごとのように、『どうするのかな』と思っていたら、なんと、指で出してあげることになっていたのだ。そんなことまでするなんて、初めて知り、とても驚いた。その光景をみている、その時ほど時間が止まったような感覚になったことはない。寮母さんのしていることが、この世のものではないように感じた。その光景は、一生忘れないと思うし、その老人の痛がっていた顔も忘れることができないだろう。」

スウェーデンなどの福祉先進国と比較しながら、彼女は今の日本の税金の使い途がおかしいと思う。「皇太子の結婚の時などである。何十億という税金をかけている。“なぜ、そういうお金を福祉などに回せないの？”と思う。」

Sさんにとっては、この体験は、彼女自身言うように、生涯忘れられない貴重な体験となるだろう。

ゼミでは例年春と夏の2回合宿をもち、夏はI II部合同でやる。いろいろな思い出がある。昔八王子の大学セミナーハウスで新ゼミ生を迎えてのとき、アルコール持込み禁止ということになっていたが、例によって、夜はコンパ、だいぶ酔っぱらって、先に寝ていた私を4年生があわてて起こしに来た。新ゼミ生の3年が飲みすぎて具合がおかしくなり、救急車を呼んだという。行ってみたら、心配ない。すぐ救急車を断われといったが、もうおそい。ウーウーとサイレンを鳴らして到着。セミナーハウスはじまって以来という。次の日は4月8日、お釈迦さまの日で、セミナーハウスの人たちが庭で甘茶やお菓子をみんなに振舞っていた。館長さんが私に声をかけて曰く、「尾形ゼミの方々、甘いものもいかがですか。」

今までつきあったゼミ生は夜昼あわせ1,000人近い。ゼミ生同士の結婚がI部3組、II部1組、IゼミとIIゼミというのが1組である。この最後

のは法政自主夜中を通じて知りあっている。昨年の3月、ゼミ同窓会を開いたら、日本全国から約150人集まってくれた。うち30数人がモグリである。北海道のM君からはわざわざどうしても行けないと電話があった。当日司会してくれたのも、そのためにファックスを入れ、高い電話代を出して方々電話をかけまくってこれだけの人数を集めてくれたのも、どちらも法学部のモグリである。だが、ゼミ生でも非ゼミ生でも、モグリでも正規でも、この35年間接した学生たちのことを書きはじめたら、それこそ『素顔の学生たち』の続篇が何冊あっても足りないが、またぜひ書きたい。

そう、学部だけではない。通教もある。私自身通教出ということがあって、全国各地でやっている学習会にはよくよばれたし、夏冬のスクーリングだけでなく、地方スクーリングや2泊3日、朝から晩までの特別スクーリングも持った。その一つ一つが思い出深い。岩手でワンソバを食べたら、私は何とか年の数だけ食べたが、大学の卒業単位の124杯をめざしていたのは、とうとうそれに達せずダウンした。目かくしをしてビールの銘柄あてをしたときは、どういうわけか、私が5種類の銘柄を皆言いあてて、私の班がとたんに高得点となったこともある。

夏のスクーリングで8月の上旬、それも午後のいちばん暑いときである。風も通らぬ教室で2コマ終わった第1日、終るのが夕方4時50分だ。5時から飯田橋の沖繩料理店「島」が開く。早速何人かと直行する。「島」がしまっていてしまったというときがあるが、このときは大丈夫。はじめての人に私がいつも材料あてさせるのは地豆腐とナーベラである。前者がピーナッツ、後者がヘチマ（のみそいため）とは、なかなかわからない。50歳というOさんは真鶴在住で、熱海の市役所で午前中仕事してからスクーリングにかけつける。ところが私と一緒に飲んで泡盛がきいて、朝目をさましたら東京駅である。始発で家へ帰り、午前中仕事、午後又スクーリングへ出て、前夜の報告があった。岡山からという女性は和泉多摩川の知人宅に泊っていたが、無事に小田急に乗りはしたものの、これまた目を覚ましたのが町田である。上りの電車はもうなくてクタシーが

7,000 円。高い泡盛についたとボヤいていた。最後の日の 2 時限目は試験だが、私の講義はレポートなので、暑熱の大教室から冷房のきいた教職員食堂へ場所を移してノミナルにした。

十和田湖畔の地方スクーリングについては『学びへの旅立ち』でも書いたことがあるが、5 日間同じ宿での寝泊りである。「魔の〇〇番室」に集り、一升瓶を立てて豆腐を肴にしながら、身の上話が出たり、校歌を知らないから校歌を教えてくださいとて、テープをとりながら 1 節づつやったりする。通教のいいところはいろんな仕事の人がおり、いろんな年の人がいるという文字通りの“人間模様”があることである。今の学部、とくに I 部のいちばんの弱点は“等質集団”だということではなからうか。障害者もいれば健常者もいる、老若男女いろんな人たちがいる、そうした中でこそお互に刺激しあい、磨きあう、文字通りの切磋琢磨ができるのである。

教員となって(2)

教育のことがずいぶん長くなってしまったが、つぎは研究。当然のこと、はじめの頃の私の研究の対象は『資本論』や『剰余価値学説史』などに置かれていた。だが、なかなか公表できるような論文が書けない。『経済志林』に助手論文『マルクスにおける競争の概念について』(1958)を載せたほか、R.L. ミークの『労働価値説の研究』(1957)、J.M. ギルマンの『利潤率の低落』(1959)、それから P. Einzig “The Euro-Dollar System—Practice and Theory of International Interest Rates”(1965)の書評を書いた。それと、大月版のマルエン全集のごく一部の翻訳、それから1966年青木書店から出た『資本論辞典』の「競争」の項目の執筆である。

1968年からはじめられ、1985年に最後の第15分冊が出された久留間敏造先生編の『マルクス経済学レキシコン』は編集委員として参加させて頂いた。編集委員会での討論と手分けしての翻訳である。朝日学術奨励金や

野呂栄太郎賞を受け、東独では海賊版まで出たこの世界的なお仕事のほんの一端でも手伝わせて頂いたことはほんとうに有難い。

久留間先生には学部から大学院、助手時代、恐慌論の研究会からレキシコンの集りと、30年にわたってご指導を頂いた。櫛田民蔵さんの話や渡欧されたときの話など、とくに酒が入ると話は尽きなかった。その間だんだん私は道をふみ外して、組合の仕事から教育問題に首をつっこむようになってしまった。先生も困ったやつだと思っておられたようだが、そのうち諦めたのかも知れない。いつだったか、「その方面で一かどになれば」と評価して下さったのは嬉しかった。

はじめてお目にかかってから亡くなられる間際まで、一貫して変わらなかったのは先生の学問に対する厳密な態度だった。だが、それを支えるものは一学究としての単なる学問的興味というようなものではけっしてないように思われる。先生はつねづね学問の出発点はヒューマニズムであると言われ、マルクスが『経済学批判』の序文で経済学の方法論を展開するのをやめて、自分が経済学へと志向するようになった経緯をその代りに書いたことの意義を強調された。外濠の土手を歩きながら、大学院の悪童どもが先生に「火星人」という渾名を奉ったことを話したら、「この火星人、地球人より人間のことを考えているぞ」とおっしゃったことがある。先生にとって学問とは単なる論理の体系ではなかったのである。

前にも書いたように、1963年法政大学教職員組合の役員をやったのがきっかけとなって、私学問題、さらに教育問題全般に関心をもつようになる。一時は大卒労働市場論に志したり、私立大学研究所をつくって資料集めをやるうと思ったりもした。石油ショックのあと、中央公論で学歴社会の問題について書いたのがきっかけとなって、1976年に時事通信社から『学歴信仰社会—大学に明日はあるか—』を出した。

この本のなかで、65年不況以後進行した富士・八幡などの大型合併を昭和30年代に起こったものと誤記している。訂正する機会がないままになってしまった。

翌 77 年には日本経済新聞社から『私立大学—“蟻地獄”のなかから—』を出し、78 年には東洋経済新報社から『教育経済論序説—私立大学の財政—』を出す。この二冊はそれまで『経済志林』その他に書いた論文などを素材にした部分が多い。前者は一般向けの新書であり、後者は学術論文集である。『私立大学』は宇井純さんから『朝日ジャーナル』で「この夏に読む 3 冊」の一つとして過分の評価を頂いた。

このごろ私は日本経済の低成長経済への移行にともなって、高等教育への進学率は一般に言われているように 50%、60%と上昇するのではなく、せいぜい 40%前後で低迷か U ターンと考えていた。事実進学率は、76 年の 38.6%をピークにむしろ低下気味だったが、文部省が 86 年から 92 年までの高等教育の 7 カ年計画を発表したあたりから、おおかたの予想を裏切って新增設、定員増のラッシュで、進学率も 93 年には 40.9%となった。しかし 92 年の 205 万人をピークとする 18 歳人口は今後激減の一途であり、120 万人台にまで低落することが必至である。すでに昨春専門学校への入学者減が始まっているが、いずれ大学、短大も深刻な事態になることが予想される。

同じころ時事通信社から私に自叙伝を書かないかという依頼があった。だが、自叙伝というやつは書いたら間もなくオダブツという例を見ており、まだ死ぬのはいやだし、材料集めもたいへんだ。教育経済論の授業でゲストをおよびしたテープと学生の感想が手もとにあるから、これをまとめたら自叙伝の一部としての授業の記録ができる。こう考えて出来たのが『学びへの旅立ち』である。ゲストの方々のお話がすばらしいものばかりだったことがあって、見知らぬ方々からの大きな反響があった。仙台の Mg 女子大学の K 教授はご自分の授業でずっとこの本をテキストにしておられ、学生たちは大学祭の「尾形憲塾」ということで、私と私の書いた本に登場する人を招いて講演会を開いている。昨年で 6 年連続である。K さんは 1 月の私の最終講義にわざわざ仙台からいらっしやって、ビデオどりまでして下さった。

1982年から83年にかけて、私は大沢勝、寺崎昌男、浜林正夫、山口正之の皆さんと共編著で青木書店から『講座・日本の大学改革』全五巻を出した。このうち第5冊目の「大学の制度改革」が私の責任編集となっている。

この編集作業を進めるなかで、いわばこの講座の番外篇とでもいおうか、大学改革の重要な要素である学生の実態を書いてくれという希望が同書店から出された。そこで教育経済論の講義で書いてもらった学生たちのレポートをもとに“学生群像”をまとめたのが『素顔の学生たち』である。三無（無気力・無関心・無責任）とか「五無」（三無プラス無感動・無作法）とか、さては「十三無」（五無プラス無抵抗・無批判・無能力・無節操・無学力・無教養・無定見・無思想）とかいわれるこのごろの若者だが、一旦何かのきっかけで火がつくと、すさまじいエネルギーとヒューマンイズムの噴出があることを、この本は示している。

1977年から79年にかけて、私は東京・三鷹にある学校法人明星学園の理事を仰せつかっていた。そこでそのころ学園の教育顧問をされていた遠山啓さんと知りあい、ご一緒に点数・序列のない高校設立に乗り出した。一方ではほんとうの学びの場として市民講座「明星自由大学」をはじめ、5年間続けた。これは後で「法政平和大学」に引き継がれることになる。法政平和大学が始められた1983年ちょうどスタートしたピースポートに私はしょっちゅう参加することになった。こうしたもろもろの自由な学びの場に加え、大学の授業で奨励しているモグリのこと、前にふれた法政自主夜中、水俣での環境問題の大学づくりを含めてまとめたのが『もうひとつの学校』である。

このすこし前、倉田侃司、柴田啓介のお二人がミネルヴァ書房の編集担当者と私を訪ねてこられ、教育原理のテキストと一緒に編集してくれないかと言われた。お二人とも大学で教職の課目として教育原理を教えているが、テキストはしちむずかしくわかりにくいものばかり、自分たちでつくりようということになった。私の『学びへの旅立ち』を読まれ、こういう内

容でこんな具合に書けばわかりやすいテキストができると思ったので、編集に加わってくれというのである。私はもともと教育学には門外漢なのだが、そう言われては断るわけにもいかない。こうしてできたのが、3人の共編著の『新しい教育の原理』（1986）である。

この本はたいへん評判がよく、5年間に13刷を重ねた。そこで「柳の下のどじょう」を狙ってか、ミネルヴァでは一般教育の教育学のテキストを編集してくれと依頼してきた。1990年にできたのが倉田さんと共編著の『新しい教育学』である。前回同様、私が最後のまとめの章を書いているが、「平和」を前に見たように広義で考えるなら、それは人権の尊重であり、あらゆる教育は平和教育に行きつくことになるとして、天皇制、第三世界、環境問題などが出てくるといいたいへん風変りな教育学のテキストである。

このほかに「国庫助成に関する全国私立大学教授会連合」編となっているが、事実上私が責任者の編著『私学助成の思想と法』（勁草書房、1979）、『私大 777 の未来—サバイバル時代に向けて—』（同、1984）、『岐路に立つ私立大学—改革への展望—』（東信堂、1992）がある。

マルクス経済学の学会である経済理論学会はちょうど私が助手をしているころにできた。マルクス経済学のメッカとして知られていた法政が根拠らとなってできたので、その設立準備の作業にいろいろこき使われた記憶がある。理論経済学会は近経の学会で、カレーライス=ライスカレーとはまったくちがう。このごろずっとご無沙汰しているが、送ってくる機関誌など見ると、日本は *creeping socialism*（忍びよる社会主義）だとか、マルクス経済学は間違っていたとか、百花齊放ならぬ百鬼夜行の模様らしい。

私自身の関心の推移を反映して、ひととき社会政策学会と一般教育学会に入っていたが、今は退会している。経済理論学会のほか、今入っているのは日本教育社会学会、日本平和学会、それにエントロピー学会である。

エントロピー学会も加わった「地球環境市民会議」実行委員会は1989年の9月、政府が音頭をとった環境問題の密室会議に対抗して、夏休み中

の法政の大教室を借りて「地球環境と日本の役割を問う国際市民会議」を開いた。海外 10 カ国も含めた参加は延べ 1,500 人をこえ、各分科会も 300 人教室満員の盛況だった。ところが、この翌年の 11 月、エントロピー学会の大会を開きたいと、私が責任者になって 4 月ころ大学へ申し込んだのに、何度連絡しても音沙汰がない。直前になって貸せないと言われ、方々に大迷惑をかけたことがある。最近はまだ教室の貸与がきびしくなり、かなり高額の使用料までとるようになった。法政というと、昔は日本母親大会とか東京母親大会とかは例年その会場だった。今昔の感にたえない。

学会のほか、私は 74 年から広島大学大学教育研究センターの研究員集會にほとんど毎年参加している。とくにここでは国際的な視野での大学問題についての収穫が多い。

また大内力先生のお宅で火曜日の夜やっていた研究会、民主教育協会の月例研究会のほか、和光大学の生越忠さんが中心の大学問題研究会、元朝日新聞記者の本多二郎さんが代々木ゼミで入試センター、高校、専門学校、日教組大学部などいろんな立場の人たちを集めてやっていた大学問題の研究会、水俣大学づくりと併行して行なわれた「環境社会学研究会」なども、それぞれずいぶん勉強になった。

管理運営に関しては、若手の人たちが中心になって大学改革論議をやっていた「法政大学研究・教育体制懇話会」への参加が思い出される。ちょうど法政が多摩地区を手に入れた直後で、65 年研究条件の白書を出した。大学院の建物は工学部の O 教授が設計したもので何とか賞をもらったが、研究室は西日がカンカン、夏いちばん居心地のいいのは東風がはいるトイレ、というような文句タラタラの白書だった。

翌 66 年には学生へのアンケートを分析した「教育白書」を出した。こうしたたぐいのものはこのごろでは珍しかったようで、新聞などでもずいぶんとり上げられたりした。

67 年には白書第 3 集として『法政大学の研究と教育—現状分析とわれわれの提言—』を出した。私はこのなかで「序論」と「財政」を担当し

た。財政分析のため、経理部の地下の倉庫で戦後間もないころから今日までの予決算書を借り出し、他大学と比較しながら数字と睨めっこである。このころは年々Ⅰ部文系4千数百名の入学者のうちその約1/3の補欠入学者があった。正規入学には点が足りないが、12万円とか24万円とか納めれば入れてあげるといっているのである。こうした補欠入学金ははじめから予算に計上されており、いちばん多いときはこれが4億円に近い。私は経理部長をやってくれと言われたことがあるが、不浄の金を扱うのはいやだし、こちらも研究を放棄する重大な決意をするのだから、補欠入学金を廃止するなら引き上げようと言って、沙汰止みになったことがある。これが最終的になくなるのはだいぶ後で、私が学部長をやめた75年からである。ともかく、こうした内容を含む予決算書を私に貸し出し、その分析もした「白書」の刊行に後援会が10万円だったか補助をしてくれたのは、いかにも法政らしい。この提言のなかに縦割と多摩への部分移転が出てくる。

この懇話会での大学改革論議は学部内の長期計画小委員会に引き継がれ、67～68年と移転を含めた議論がなされる。全学的なものとしては総合計画審議会が67年に作られ、私はその第2専門委員会で縦割・横割問題やカリキュラムの検討を行なった。第2外国語廃止論をぶって、ロシア語などの教員にだいぶ憎まれたことがある。この審議会の議論は2年続けられたが、69年の学園“紛争”で中断となる。なお、このころ私は大学の企画室付となっている。

このあと総合計画作成委員会（プロジェクトチーム）がスタートした。私は移転問題を中心とする学部の大学改革委員会の論議に72～73年と参加しており、それが74年の学部長への選出につながっている。

経済学部ではこの後も移転についての論議を続け、一旦出された全学移転論が御破算になった後は学部として独自の検討を続けた。81年には大学改革委員会（私は主に入試とⅡ部・通教）の合宿を行い、そこでの討議資料を公表し、さらに82年3月に「素案」を全学に公表、84年に移転ということになった。

いちばんもめたのは図書館の本の市ヶ谷と多摩への配分とⅡ部問題だった。Ⅱ部については、大学院、Ⅰ部、Ⅱ部、通教といたる所無責任体制だから、戦線を縮小してⅡ部を廃止すべしという声がずいぶん高かった。理念からいっても、肩書きがほしいなら通教でいいし、中身だけほしいというならカルチャー・センターや市民講座がある。実態からいっても、勤労学生はせいぜい1~2割しかいない。総長からはⅡ部を多摩でやることを検討してほしいという要請があったが、それではⅡ部をつぶすも同然と、教授会では拒否した。そして84年から勤労者・社会人入学をはじめたが、これは予想通り非常にいい効果をもたらした。ゼミなどでも、50歳をこえたおばちゃんや30代半ばのケースワーカーなどがほかの学生たちをリードしてくれる。ほかの学部でなぜやらないのかと思う。

法政大学新聞は移転問題について経済学部教員にアンケートによる質問を行なっているが、私はこれへの回答のなかで「話しあい」について次のように言っている。

民主主義の根本原理は、「下部」の一人一人が責任をもつことです。学部長、執行部、教授会構成員それぞれの責任がありますが、最終責任は構成員一人一人にあると考えます。「話しあい」は当然ながら、教授会の「上部」と学生団体の「上部」だけ行われるべきものではなく、「下部」の教員一人一人がゼミや講義その他で話しあうことを基本にします（私も含めて多くの教員がやっているように）。これと関連して学生団体執行部が、素案の一般学生への配布へ抗議するなどは、自分たちだけが「学生団体」であるという「朕は国家なり」式の思い上がりであり大衆蔑視であると考えます。

私がとくに力を入れてかかわったのは私大への国庫助成問題である。はじめは教職員組合レベルだったが、71年ごろからは教授会レベルのものとなった。73年には「国庫助成に関する私立大学教授会関東連絡協議会」ができ、74年には全国組織「国庫助成に関する全国私立大学教授会連合」が結成された。私はそのいずれの結成にも当初から関係し、学内では国庫

助成推進委員会の責任者として今日まで努力を続けてきた。これについては広島大学の『大学論集』第23集（1993年度）に「私大国庫助成運動30年をふりかえって」と題して書いている。結論としては、大卒という特権をなくして大学をほんとうの学びの場にすること、当面現行の経常費補助は明確な理念なり哲学なりのないままに発足したものだから、原則的にこれをやめて、学生への助成を主体にすべしと提唱している。

管理運営の一部になるが、学生問題がある。67年には学生厚生補導委員だったが、学生の処分問題をめぐり総長と学部長が教授室に拉致監禁され、機動隊によって他大学を含む285名という前代未聞の学生逮捕があった。68年は民青と中核の二つの自治会ができて、教授会は総出で連日両方の自治会と会見、寝袋で研究室に泊りこむこともしばしばだった。

学生とのかかわりということでは、これはむしろ本来「教育」に属するものだろうが、便宜的にここに書くクラブ、サークルがある。ワンダー・マウンテン・クラブという山登りのクラブができてから間もなく部長となって、二十数年になる。前はよく一緒に冬山や春山に行ったし、夏に南ア全山縦走をしたこともある。このごろはなかなか予定が合わなくて、せいぜい五月のゴールデンウィークの新（入生）歓（迎）の合宿に顔を出すぐらいである。それでも部長は部長として、毎回の合宿はその都度計画書を持ってくるし、忘年会や卒業生の追い出しコンパにも必ず声をかけてくれる。ただ昔よりずっと人数は少なくなった。

これと対照的なのが顧問をやっている朝鮮文化研究会である。この顧問になったのはそんなに昔ではないが、年に一度ハンコをもらいに來るだけで、どういう顔ぶれでどういう活動をやっているのかさっぱりわからない。そういう形式だけの顧問はいやだから、何か報告するなり、声をかけるなりしてくれと言っても、梨の礫である。ほかのクラブ、サークルもこんなものだろうか。

直接の大学の管理運営ではないが、教職員組合運動への参加がある。63年にローテーションで組合の役員をやったとき、ちょうど常務理事を学内

2人校友2人にせよという校友側の要求をめぐる「2:2問題」があった。校友側からはこのほか、総長・理事長の分離、校友出身教員を50%までふやす、人事を含む総務と財務の担当常務理事を校友に、教員の人事権を理事会に、などの要求が出されている。このときの校友会長はあとで金の延棒着服で失脚した日通社長 F 氏である。教授会でもこれが問題としてとり上げられ、私は一連の経過を「常務理事問題討議資料」としてまとめたりした。

組合で春闘をやっていた64年の春、4月17日の公労協のストライキをめぐる共産党は4月8日突如挑発ストだからやめろと言い出した。当時日野にいた私のところにも共産党の市議がやってきて、苦しい弁明をした。ところが、7月にはこの4.8声明の自己批判である。こう二転三転では下部の党員はたまったものではないと思った。この4.8声明のため、私が一緒に資料づくりなどしていた慶応労組の書記は板ばさみになってクビになったりしたのである。

このあと、65年には上部団体の東京私学教職員組合連合の大学部長である。このときも1週間のうち家に帰るのは1日だけということもあり、研究室に泊りこんだりした。年末闘争や春闘で方々の組合をまわり、資料づくりや泊りこみの合宿をしたりした。明大の年末闘争では色さまさまのステッカーが事務室の扉から廊下の壁から貼られていた。曰く、「年の暮れ一時金くれ」、「出すか出さぬかこりゃどうじゃ」、「満額獲得して早くあなたと結婚したいわ」、「出さぬなら出させてみよう一時金」、「出すもの出してスッキリしよう」etc.

未加盟だが、早稲田や慶応にも行った。早稲田の春闘はちょうど学費値上げで学生がストライキをやっている最中である。泊りこみの合宿から早稲田の教員組合へかけつけ、夜半に委員長と一緒に学内をパトロールしたりした。6月の執行部交替の大会には、「尾形さんはぜひ呼ぼう」ということで、声をかけてくれた。

慶応の春闘では、塾監局での団交で、うしろの方で首をひっこめながら

参加した。ここは「看護婦組合」と言われるだけあって、「病院にゴキブリがぞろぞろいるのを理事は知っているか!」と、看護婦さんたちの追及はきびしい。他大学の回答を紙に書いて、副委員長のIさんに、うしろの方からこっそり送ってもらったりした。

もうひとつ、大学の生協の理事をやったのが1967年、生協職員による不正事件があった年である。生協の組合と食堂でやった団交も懐しく思い出される。「理事会は金儲け主義で生協の理念に背いている」などという言い方は、大学の組合によく似ているなと思ったりした覚えがある。

社会奉仕としては、マスコミなどへのかかわりは別にして、何といても、83年から92年まで私が世話人代表として10年間続けた「法政平和大学」が大きい。広義の「平和」だから、第3世界、教育、環境、地方自治、障害者など広汎多岐にわたる問題がとり上げられた。10年間の講師は番外講座、連続講座、合宿なども入れて108人、受講者は講義録をお送りする「通信教育」をふくめ延べ3万4,000人に及んだ。

この内容の詳細については、オリジン出版センター刊の『法政平和大学10年のあゆみ』をみて頂きたいが、そこで書き落したことを一つだけ加えておこう。88年春の卒業式で文学部総代の女子学生は「大学に来ていちばんよかったことは法政平和大学に出会えたことです」と言っている。

全体を通じて何といてもハイライトとなったのは、本島等長崎市長の天皇の戦争責任発言を擁護するための番外講座「天皇問題を考える」であろう。このときは午後2時から10時近くまで、延々7時間半の長丁場にもかかわらず、511番教室をうめつくした約600人の受講者で帰る者はほとんどなかった。

だが、この番外講座を契機に、これまできわめて協力的だった大学の平和大学への姿勢は急激に変わってくる。このことは上述の『10年のあゆみ』で述べているので、ここではくり返さない。ただ91年6月当時の日本社会党委員長土井たか子さんをお招きしたときの大学の対応についてだけ触れておこう。

6月15日の平和大学の前々日、私は大学の担当課長Sさんから担当理事のTさんと麹町署へ同行するよう求められた。行ったところ、署では要人警護のSPだけでは心配だから、署の方でも構内に入りたいという。SPもそうしてくれというのである。浅沼稲次郎さんが60年安保の年刺殺されたときと状況は全然ちがうが、万一のことがあったら、総長や私が辞めるぐらいでは済まない。やむをえないだろうと私は言った。T理事からは話が終わっての帰りがけにも何も話がなくて、私は大学側も麹町署の立入りを了承したものだと思った。

ところが、平和大学の当日、中核派の学生が「公安が入っているとは何事だ」と騒ぎ出した。学生部では学生が騒いではじめて知ったという。担当理事から何も話がなかったのだそうだ。聞いてみたら、T理事はSPだけ了承したのだという。冗談じゃない。平和大学世話人代表とはいえ、一介の教授がOKしたからとて公安が大学側の了承なしに入るなどということはありえないことである。学部長会議では私が独断で麹町署を入れたという報告になったらしい。T理事はあとで麹町署に抗議に行ったという。

私はこのあと、自治会を名のる人たち数名から授業のときの教室でと55年館前広場でと2回にわたり追及を受けた。彼らを書いた自己批判書に署名せよというのである。学生部の責任者もそうしてくれという。他人が書いたものに署名など出来ないと私は突っぱねた。大学は秋に2年にわたる学費値上げを控えている。ここは私1人だけ悪者になればいいだろうと、世話人会で諮って、配慮を欠いたことを反省し、今後こういうことのないように努力するという声明を出した。大学側が麹町署でどうしたかという学生からの問いには、それは大学に聞けと答えたのだが、不思議なことに、その後大学への彼らの追及は何もない。

この年末、学費値上げでバリストになったが、年度が変わってからは、2年連続の学費値上げなのにもかかわらず、アジビラが1度貼られただけで、あとは何もしないでである。

身体生命と大学自治はどちらが優先するか。彼らからの追及のなかで、

彼らはたとえば知花昌一さんの集会では自分たちの力で防衛したという。だが、彼らとちがって、鉄パイプその他の物理的な力を持っていない私たちは、そういうことは不可能である。

69年のバリストの直前のことだった。夜9時すぎ、仕事を終えて帰ろうとしたところが、全共闘が反対派の学生を自治会室のある第一校舎につれこんだという。私は学生課長と一緒にとんで行って、経済の自治会委員長にすぐつれこんだ学生を出すよう要求した。ところが、「よそのセクトだろ。おれんとは知らんよ」とのれんに腕おしである。そのうち、友達がつれこまれたと学生から通報があったので機動隊を入れる、という電話である。私は猶予を求めてまた第一校舎へとんで行き、さし迫った事態を告げた。やっと外に出された学生は上半身裸であちこちむごたらしい傷だらけ、水をかけられたらしくビショぬれである。早速車で病院へ運ばせたが、その間警察からは矢つぎばやの電話だった。

大学の自治とは何なのか。

ところでこうした法政平和大学の事務所に私の研究室を使っていることが学部長会議で問題になったということだ。社会奉仕は大学の重要な機能である。それがなければ大学は閉ざされた大学になってしまう。ただ、相部屋をこのため独占して他の方に迷惑をかけたのは申し訳ないが、「進歩にして自由」の法政なら、こういう市民講座は本来大学自身がやるべきもの、まして生涯学習時代である。

さて、社会奉仕としてはこのほかに、私は1966年から78年ごろまで日本学術会議の私立大学問題小委員会、大学問題特別委員会、科学者の待遇問題委員会および私立大学問題特別委員会の専門委員として、各大学へ出向いてアンケートでの調査、シンポジウムなどでの報告、各委員会の報告書の一部の執筆、各政党の私大政策のヒアリングなどに参加している。

また1977年から79年にかけて、日教組の大学問題検討委員会（委員長梅根悟さん）の委員の1人として、大学改革のための討論、報告書作製などに参加した。この委員会はさきに報告書をだした教育制度検討委員会

大学についての検討がきわめて不十分であるとして設けられたもので、さきの報告が「国民の教育要求」をきわめて美化していたのに対し、学歴信仰の現実を直視するところから出発している。

社会奉仕を広くとって学外活動とすれば、砂川闘争、60 年安保、筑波大学反対、日韓闘争、大学立法反対、最近では PKO 闘争などの行動も入るだろう。アメリカのベトナム侵略に対しては、アメリカ大統領に抗議する学内の署名集めをして、藤田省三さん、田沼肇さん、角瀬保雄さんとアメリカ大使館に持っていった。しかし、何ととっても思い出深いものは 60 年安保のときである。連日のように教授懇談会、511 番教室を埋めつくしての大集会、そしてそれが終ると、長老教授を先頭に教職員学生が延々長蛇の列をつくって市ヶ谷駅前から国会へと行進が続いた。国会内に座りこんだ学生たちを無事に出させるように、法政と明治の教授団が社共両党の議員に交渉したりもした。社会学部の Y 教授は警官の警棒の打撲のため、「心の旅路」になったりしたが、教職員学生の蜜月時代であり、文字通りの古きよき時代である。

“オリ”の意味するもの——自主解決からロックアウトへ——

1969 年のパリストの年と翌 70 年市ヶ谷校舎のまわりに高さ 3 メートルの“オリ”＝鉄柵がつくられたときのことは、1971 年の雑誌『法政』に書いているし、それに手を加えたものを私の『教育経済論序説』の末尾にのせている。この“オリ”は 1992 年解体されたが、この両年は 43 年の私の法政生活でもっとも印象に残る年だし、毎年の教育経済論の講義でも、前期の最後の時間に法政の歴史の一コマとして話をしている。今の学生はもちろん、若い教職員の人たちも知らないことだ。そこで、ここではごくかいつまんで、この 2 年間のことを紹介する。

1968 年から 69 年にかけて、スチューデント・パワーの嵐が世界中の大学で吹き荒れた。日本もその例外ではなく、その両横綱が東大闘争と日大

闘争だったことは誰もが認めるところだろう。だが、東大では64年の1月、2日にわたる安田磐の攻防戦で戦いはすでに終盤となっていた。日大は旧国技館を買いとった講堂での前年9月の大衆団交で一旦総辞職を約束した理事会が佐藤首相のテコ入れで開き直り、次々各校舎に機動隊導入一ロックアウトで、これまた収束の方向となっていた。しかし、それによって、全国の学園“紛争”は鎮静化するどころか、逆にバリストは国公私立を問わず燎原の火のように広がることになる。法政もそのなかに巻きこまれることになった。

この年の2月、文部省は警察が大学の要請をまたず独断で大学内に立ち入ることができるという次官通達を出している。また中教審は当面の“紛争解決”のための答申を行ない、政府はこれをうけて8月に大学の廃校も含む大学立法を強行「成立」させる。この年のはじめ、法政大学と経済学部教授会も含め、各大学は挙って権力的解決を目指す大学立法に反対の声明を出し、教授たちの大学立法反対デモも何度か行なわれた。しかし、一旦大学立法が成立するや、各大学は相ついで機動隊導入一ロックアウトという形で授業を再開して行った。

法政では4月の図書館封鎖にはじまり、6月から11月の授業再開までの5カ月にわたる全学封鎖が安保・沖繩・大学立法闘争を叫ぶ法大全共闘によってなされた。だが、法政のとったのは他大学と異なる途だった。5月から9、10月にかけてはむしろ大学の方からくりかえし全学規模や学部レベルの「団交」が呼びかけられ、この年主任として学部長補佐であった私も含めた教員たちがバリケードの中に入って、封鎖している学生たちと激論することもしばしばだった。総長団交の交渉のため夜バ리를こえて総長室に行くと、そこは中核派の根拠地になっていて、機関紙「前進」の発送などをやっている。外へ出てくると今度は民青につかまって、「何の取り引きをしてきた」と吊るし上げられる始末である。

まだ全学バリストに入らないころ、55年館前でテントを張って臨時職員解雇反対のハンスト中の職員の1人は、全共闘と民青が校庭で激突する

のを目の前にして、どちらに対しても「私の心から一様に叫ぶのは『逃げる、うつな!』ということだけであった」という。そしてナンセンスといわれ、夢想といわれようと、全共闘と民青が共闘する以外に安保・大学立法を闘う道はない、と叫ぶのである。「でなければ、学生集団間の対立、憎悪は…やがて死をさえよぶことは必至であり、その行きつく果ては不毛と荒廃であるだろう」この言葉は残念ながら現実となったのだった。

法大全共闘といっても、それは組織をかくれみのにするのではなく、1人1人が自ら決意し自らの責任において行動するという東大全共闘や日大全共闘とはまったく違っていた。中核派とプロ軍（プロレタリア軍団）の引きまわしだったのである。通信教育の夏のスクーリング粉碎を叫ぶ彼らを説得するため、私は第一校舎の1階の経済の自治会室に行ったことがある。そこで見たのは、中核派のリーダーの1人のT君が夏休みに帰郷しようという学生を懸命に説得しているところだった。

この年さんざん中核さんとつきあわされたのが腐れ縁になって、このときの経済学部自治会の委員長N君も、このT君も、あとでパクられたときの保釈の身元引受人に私はなることになる。

バリストといっても、校内に学生はろくに居ない。バリケードはトーチムポールに過ぎなかったのである。なお、「帝国主義大学解体」を呼号する彼らが最後まで就職部を封鎖しなかったのは、何とも皮肉な話である。

法政も9月ロックアウトという“水鳥の羽音”におびえた全共闘は、私が仕事を手伝ってもらったことのある反闘委（大学院反戦闘争委員会）の1人に私の自宅への電話で真偽をたしかめさせてくる。大学“当局”の1人である私にである。甘ったれた話だ。「法政がそういうことをするとどこかどうか考えてみろ」というのが私の返事だった。それでも安心できず、前にもましてバリを強化し、新館は安田岩には及びもつかないが徹底抗戦の構えとなる。9月以降麴町署からはくりかえしロックアウトの要請のあるなかで、総長「団交」のための折衝は続けられた。だが、このころの全共闘は凶暴さでその名を知らぬ者もないプロ軍のリーダーの院生T

君の全一支配の下にあった。6月段階ではまだ研究室にあった私の本はあとで入ったときはごっそりなくなっていた。また反闘委の人たちの御飯が炊き上がったのをプロ軍が電気釜ごとそっくり強奪という状況だった。これが法大全共闘の「革命的規律」の実態である。このT君には、この前年だったか、私は第一校舎前の学生たちの衝突のさい割って入って、「この野郎！」とパンチを食い、口の中を4針縫ったことがある。

10月に入り、学生部長を団長とし、私たち各学部主任を団員とする予備折衝団は、出版クラブ―市ヶ谷旅館―フェアモントホテルと、転々としながら徹夜の折衝を続けた。だが、努力空しく、ゲバがはじまる。外で様子を見守っていた総長、学部長のうち経済学部長から私に電話が入る。学生がついてくる。学部長「決断していいか」私「やむをえません」機動隊を入れるというのだ。私はとって返して「逃げろ！」彼らをパくらせるのが目的ではない。ゲバから解放されればいいのだ。だが、モタモタしているうちに、全員逮捕。

彼らは「反帝・反スタ」というが、度重なる内ゲバ、テロ、リンチから殺人に至るまで、己のみが絶対正しく、その他は抹殺してもよいという、宗教戦争的な「スターリニズム」が根底にあったといえよう。

ともかく、自治会を通じて話しあうという努力は一頓挫、このままゆけば4年生の卒業も危いというタイム・リミットも近づくなかで、直接全学生に総長が呼びかける全学集会ということになった。

一方では「一般学生」との接触の努力も続けられた。経済学部では大学周辺の旅館を転々としながら連日、それもしばしば夜おそくまで、時には夜を徹して、教授会を開いた。そこで論議されたのは、目の前のバリケードをどうしたら1日も早く解除できるかということでは必ずしもなかった。ありきたりの大学に復帰するための授業再開では、まず私たち自身が納得できない。経済学部にもふさわしく、今の日本の資本主義のなかで大学はどのように位置づけられるのか、われわれはどのような大学を目指すのか、大学とは何かというような一見迂遠な問題で、それこそつかみあわん

ばかりの激論だった。

こうした議論をふまえて、何度か学部集会も開かれたし、ゼミはもちろん、クラス単位、講義単位の集りなど、部分的ながら持たれた。私も講義の学生たちに 1 人 1 人通知を出し、吉祥寺の一高を借りて集りを持つとしたが、本校からのゲバの波及を恐れて部屋は貸してもらえない。仕方なく、井の頭公園の青空教室で大学立法の本質、大学とは何かを議論した。外濠公園、喫茶店、田町校舎と転々である。だがあとで、学生は「あのときが一番大学らしかった」と言ってくれた。大学とは建物でも制度でもない。学びたい人間とこれに応える人間の集団（universitas）なのだ。

いつロックアウトになるかという綱わたりみたいな毎日だったが、川崎のグラウンドに 6,000 人の学生を集めた全学集会に何とか解決の目途は見えてきた。バリの中での学部集会では、私たちはむしろ外部の力の介入を招く全共闘の暴力行為を糾弾し、自治会はこれに答え、自治会反対派も壇上で発言した。学部集会やシンポジウムと併行して、62 年館ではⅡ部の授業を部分的に始めた。「なしくずし」方式である。

「佐藤訪米阻止」を呼号する 11 月 17 日の羽田「決戦」のあと、自治会のバリスト解除決議のないまま 20 日から授業再開となる。プロ軍は少数が 511 番教室に集って勝手に「解除決議」をした。中核派は授業再開の初日だけ他の小セクトと一緒にあって形ばかりの「授業粉碎」闘争をやったが、それだけのことだった。数カ月後の入試時期になると、この両セクトは「帝国主義大学解体」どころか、合格電報のアルバイトにせいを出すことになる。プロ軍のリーダーの T 君に至っては、試験監督のアルバイトで小遣いかせぎである。

こうして授業ははじめられたが、1 月に入って総長団交の際、文学部の松田君は鉄パイプで殴られて頭蓋骨陥没の重傷を受けた。これで出されたのが、①人身に対して危害を加える行為、②凶器となるべきものの所持と集積、威嚇行為など暴力行使の準備となる行為、③大学の運営に重大な支障をおよぼす業務、授業、試験の妨害、④入学施設の不法使用、占拠、封

鎖および破壊、⑤許可なき者の大学施設の徹夜使用、宿泊、⑥許可なき学者の大学構内への立入り、を禁じるいわゆる6項目である。このころから、大学は機動隊導入を背景に図書館、新館、大学院と封鎖を解除させていった。

私が主任だったこの年は教授会が55回、続回が1回、定足数の2/3に達しない懇談会が6回で、毎回4時間から9時間、夜を徹したこともあった。議事録作製も主任の仕事である。一方では学部長会議に代理で出席することもよくあるし、教職実習生の見廻り、ゼミでの私大調査、学生の研究会と、よく体がもったものだと思う。そのあい間には東大闘争でパクられた中核の活動家 K 君に何度も面会、差入れに行き、ほかからまったく便りが無いという彼に、手紙もずいぶん書いた。なお、この年の自治会費は出されている。

新年度になってなお、封鎖されたまま残ったのが、大学院の数室と六角校舎だった。その六角校舎で、8月に中核派による革マルの学生海老原君の殺人事件が起こったのである。死体は翌朝厚生年金病院に捨ててあった。前年バリスタの自主解決で法政をもち上げたマスコミは、掌をうって返すように、あんな甘いことをしたからこんなことになったと袋叩きである。総長は文部省に呼ばれた。大学が取った措置はまず新館・六角校舎・第一校舎への立入り禁止と、ついで、①施設の不法使用禁止、②夜間のロックアウト、③自治会を含む学生諸団体の非暴力声明要求、といういわゆる“3原則”である。「自発的に」声明を出せとはどういうことだろうか。

9月に入りⅠ部・Ⅱ部ごと総長の説明集会、続く総長「団交」は決裂し、見切り発車となった。28日からはロックアウト、一夜にして鉄板の囲いははりめぐらされた。前年の半年にわたる占拠、2億円に及ぶ建物破壊を不問にした大学が、今度はロックアウト粉碎を叫ぶ学生たちを不法侵入、プレファブ破壊で告訴し、3人が逮捕された。

この鉄板の囲いのなかで、密室状況という新館と六角校舎が解体され

た。六角は入ってみたら、日大全共闘、浪共闘（浪人全共闘）、反戦高協、社学同などの部屋があり、法政が吹きだまりになっていた跡が歴然だった。

だが、物理的な密室をなくしても、「状況密室」こそが問題なのだ。ラッシュ時の池袋駅構内で1時間余も暴行を受けた海老原君がすでに虫の息だったことを見ても明らかである。そのあと山手線につれこまれた彼がどこにつれてゆかれるかも、わかっていたに違いない。

そして高さ3メートル、延長700メートルに近い“オリ”は総工費5,400万円を費して作られた。そして総長自身こんな嚴重なものをつくるはずじゃなかったと歎いた検問のための“改札口”も。

1年前の大学の告示は言った。「封鎖は…教員と学生または学生相互間の接触交流の場をうばい…」そして1年後、今度は大学が自ら学生をしめ出して「接触交流の場」を奪うことになる。せめて関係のない62年館だけでも学生同士が、教職員と学生が、事態について話しあう場として残せなかったのだろうか。

私のゼミでは前年に続き、この年も苦労しながら私大の資料づくりをやっていたが、「総括」のなかで怒りをこめて言っている。

「9月28日（月）。われわれの大学はロックアウトに入る。昨年と同様に調査活動が難行するのではなからうかと危惧された。しかし大学からロックアウトされようが、『授業』であろうがなからうが、われわれはゼミ—調査をやめるわけにはいかない」

11月24日、1年前と4日ちがいで授業は再開された。しかし、全学ないし学部レベルの説明集会や「団交」はもはやない。2カ月近くの間にならずか6回の「大学からのお知らせ」という紙きれがすべてだったわけである。

69年と70年でいろいろ条件の違いはある。だが、根本問題は教職員と学生との間の切断ということである。そこには大学は存在しない。

69年の「説得路線」が誤っていたから、70年にあんなことになったという人もいる。そうだろうか。むしろ、69年については、説得、糾弾、

話し合い、対決、あらゆる形での学生との接触、とくに「一般教員」と「一般学生」のそれ、が実はきわめて不十分だった。そしてそこにこそ殺人事件まで招いた大学の基本的責任があったのではなかろうか。

もっと掘り下げるなら、「学生」とは単に学生証を持っている者の謂ではない。ほんとうに学びたいという欲求を持つ人たちである。そういう人たちが学べないで、キャンパスにいるのは自治会費目あての一にぎりのセクトと、大卒パスポート目あてのその他大勢が大半の「学生」となっている現実がある。ほんものの universitas だったら、こんな問題が起こるはずはない。

学部長時代

私が学部長を務めたのは、1974年の4月から翌年の3月までの1年間だった。それまでは選挙はあっても事実上名簿順だったので、それで行けば10年も先の私が選出されたのはまったく予想外だった。その前年まで、学部内の大学改革委員会で移転問題などに熱心に取り組んでいたため、先頭に立って移転を推進させようと、とくに若い連中の間にだいぶ根廻しがあったらしい。

このごろのノートを繰ってみると、教授会のスタッフは39人で今の半分（ほかに助手2人）、年間の教授会が22回、学部長会議が46回となっている。教授会は長時間はごめんと、だいたい2〜3時間で終えており、3時間をこえたのは1回だけだった。学部長会議が多いのは、後で見るように、学生問題がかなり深刻な状況で、緊急の会議が頻繁にあったためである。この年の主任はあとで千葉大学に移った経済史の田中豊治さん、バリスタの次の年からおかれるようになった副主任は江村栄一さんで、主任が学務、副主任が学生問題という担当はだいたいこのころ定着したものである。

新年度になって初仕事は入学式への出席である。例年の会場である武道

館では、大きな日の丸が下げられているので、これを撤去するよう事前に申し入れてあったのだが、当日相変わらず下がっているので、中村哲総長に文句を言った覚えがある。学部長と理事は籬壇に並ぶのだが、私はノーネクタイで、中哲さんから「君も主義者だね」と言われた。昔は冠婚葬祭のときぐらいはしめていたのだが、面倒くさがりで、いつのころからか、全然しなくなってからもう久しい。とくに夏など、むし暑い日本でネクタイというのは頂けない。

それでも、このころはまだ背広がふだん着だった。多摩へ移ってしばらくしてからはジャンパーにジーパン姿になった。いつか講義への学生の感想で、正装しろとはいわないが、ジーパン姿はどうも、というのがあった。こういう若者もいるらしい。

私が「経済学部履修要綱」の冒頭の学部長挨拶では「専門課程を履修する諸君へ」と題してつぎのように言っている。

法政大学の現状は、前期 2 年の教養課程と後期 2 年の専門課程が、ほとんど有機的関連のないまま分断されている「ヨコ割」制です。おまけに 4 年次には就職という問題があります。もともと別に経済学を学ぶつもりで入学したわけでもないおおかたの学生諸君にとって、限られた期間内の専門課程の履修—というより単位修得—は、卒業免状というパスポートを手に入れるための「必要悪」でしかないかも知れません。しかし、「何にも知らずに卒業して、世に出て恥かく〇大生」、覚えたのはせいぜいマージャンだけというのでは、あまりにもわびしい、二度と返らない貴重な青春ではないでしょうか。

もっとも大卒の行先は年々セールスからさらにはブルーカラーという時代です。今さら経済学をかじったからどうということもありません。しかし、学問を通じて、私たちは日常性の中に根をおろしながらしかも日常性の中に埋没しない批判精神を、生き方を養うことができます。そうした意味から、経済学部ではとくにゼミナールを重視してきています。さまざまな講義も、他学部の公開課目も、さらには一般教育諸課目

も、ゼミやその他の場で触発された問題意識をいろいろの角度から発展させる素材として位置づけようでしょう。時には他学部、他大学への「モグリ」も奨励したい（個人的には）と思います。進学率が高まったとはいえ、4年制大学に入学できるのは4人に1人です。学生諸君が進学できなかった大多数の人たちの側に立つ存在として巣立つのでなければ、大学は社会的存在意義を失うでしょう。しかし歴史はむしろ、いわゆる有名大学ほど正反対の役割を果たしてきたことを示しています。先頭に立って旗を振る人間よりもむしろ歴史を1センチでも1ミリでもおし進める自覚的な「一石一木」たるべく、学生諸君が学問を通じ、時にはノミナル＝コンパを通じ、ぶつかってこられることを、経済学部の全教員を待っています。

1974年4月

経済学部長 尾形 憲

モグリ奨励は公文書でだから少しは気がひけて「個人的には」などと殊勝なことを言っているが、最後に「経済学部長 尾形憲」とある。だいぶ前からⅡ部のゼミに単位にならない通教生や社会学部の学生がいたのを反映しているのだろう。

この年は「専門課目オール選択」論議をやり、翌年からマスプロ大学として欠かせないクラス単位の「原典講読」だけは必修として残したが、あとは原論も含めそれまで5課目あった必修を事実上なくした。69年の大学“紛争”のさなかで、13課目あった必修を5課目に減らしたのを、さらに押し進めたわけである。

ゼミについては2、3年次におろして、4年では卒論ということが論議されたが、これが実現するのは、ずっと後になって多摩移転とともにである。だが、2年は4年の顔をほとんど知らないから、卒業生の追い出しコンパがなくなり、記念品贈呈もなくなってしまった。私が法政を去るこの春からの新生生のゼミはまた3、4年に戻ることになるようだ。

学部長時代をふりかえって、思い出される大きなことが三つある。一つ

は移転問題の論議であり、二番目は自治会費問題、三番目が学費値上げ問題である。

移転問題については、全学的な総合計画作製委員会の審議が進められていて、ちょうど私が学部長に就任した春にその答申が出されてきた。これは2学部新設、1~2学部移転を骨子とするものだったが、この年度の議論のなかで、2学部新設は無理ということになり、1学部新設、2学部移転という方向に固まっていた。移転についてはじめから乗り気だったのは経営学部、それに経済学部である。

経済学部で移転論が強かったのは、本校キャンパスが手狭で、6,000坪のところに昼夜2万何千人かの学生がひしめいているという物理的な理由だけではない。それよりもむしろ、1年から4年まで縦割で、一貫した責任もてるカリキュラムを組もうという教学上の理由だった。それと、そうしたカリキュラムも入試も、全学体制などという面倒なものに煩わされることなく、どんどん独自にやろうという“分権”思想である。中教審も日教組も学生数1万人以上の大学は分割したらいいといている。2万何千人などというマンモス大学が5学部雑居では、全学的な意志決定などなかなかできないことは当然である。組合レベル、研究・教育体制懇話会、総合計画作製委員会、全学カリキュラム委員会とこれまでかかわったいろんなところの改革論議で、私がいつも痛感したのは“学部の壁”であった。総長や理事会の権限を大幅に学部レベルにおろしてしまったらいい。それがデモクラシーというものだ。

そういうわけで、学部内の大学改革委員会での討論を毎回教授会にかけ、議論を深めていった。また経営学部と合同で討議したりもした。移転の先輩である中央大学へ若手（といっても今はもう学部長クラス）と一緒に訪ねて行って、学長や担当理事の話を聞いたり、資料をもらってきたりしたこともある。うちの理事からは「学部長が勝手にそんなことをしてもらっては困る」と文句を言われたが、「理事がやってくれないから、こちらがやらざるをえないんだ」と逆ねじを食わせた。

この年の社会学部長は芝田進午さんだったが、10月に教授会で町田の土地を見てきてからは、経済・経営両学部と一緒に社会学部も移ろうという空気が強くなったということである。その経営学部はいつの間にか移転には消極論となり、経済学部と社会学部の移転が実現したのは1984年になる。

二番目の自治会費問題だが、この年は私が主任をやった1969年ほどではないにしても、まだセクト間の衝突がしょっちゅうだった。中核派と革マル派、民青と赤ヘル・黒ヘル間の乱闘などが頻繁にあり、とくに前者のそれは政文堂脇の路上と早暁の55年館前との二回にわたる大乱闘となって、死者や多数の重軽傷者まで出し、どちらも数十名が逮捕された。何しろ、入学式では武道館前に3~400人の中核派が居座るという時節である。学生会館が搜索を受け、鉄パイプ多数が押収されると、「自衛のための手段をとり上げるとはけしからん」と抗議する始末である。時には学生部や教授室の打ちこわし、あとで学費値上げのときは総長室や理事室、経理部などへの乱入、破壊があった。

そうした折から毎年教授会の頭痛の種となる自治会費について、中核派の拠点経済学部自治会とのわたりあいである。いつも前期に自治委員が各クラスで選出されるのに、この年は上に見たゲバ騒ぎのせい、選出が後期にもちこされた。選出のためには外国語などのクラス授業の時間を割くという便宜を提供する慣習がある。そこで第一教養部に連絡して自治委員選出の便宜を図ったら、各クラスからの選出数を届けてきた。ほかの学部はその届けだけによる文字通りの形式審査ですます所が多いようだが、経済学部では、ゼミやクラスの担当教員が選出状況をたしかめるということを毎年やっている。何よりも問題となったのは、選挙期間のうちの1日は祭日で授業がないのに、自治委員が選ばれたとしてその人数が届け出されたことである。また4年生はクラス授業がないので、3年生のときの委員が持ち上がりという扱いになっているが、教授会の前年の調査では3年生で選出がなかった。

交渉相手は委員長の K 君と黒幕の O 君であるが、どちらも 5 年留級の 3 年生という古強者である。後者については水かけ論だが、前者については、委員候補者についてそのクラス全員に電話などで信任を確かめたという。そんな証拠も何も残らないものを信用するわけにはいかない。年を越して交渉は 2 月にまでもつれこんだが、結局この年度は自治会費は凍結ということになった。

学生自治会は、多くの私大で全員加盟制になっている。これは学生自治も重要な教育の一環というアメリカ流の考え方の輸入である。だが、学生自治は教授会自治と対等の立場に立つ“車の両輪”の一つでなければならない。

全員制加盟制では、学生は入学と同時に大学“当局”によっていやおうなしに自治会加入を強制される形で、入学金や授業料と一緒に自治会費を納入させられる。大学が代わって徴収する“代理徴収制度”である。本来ならば、自治会が自分で学生に加入を呼びかけ、自治会費を集めるわけで、以前の国立ではそういう所が多かった。私立でも、和光大学は創立後学長梅根悟さんの主張で同様にやったところが、間もなく自治会はつぶれてしまったという。大学の手で学生を入会させてもらい、金を集めてもらうのでは、“他治会”でしかない。

この自治会費は、毎年執行部が自治委員会、学生大会を経て正式に成立したと教授会が認めれば、支出されるということになるが、一々教授会から自治委員会や大会に出向いてそれらが規約に従って成立したかどうかをチェックするということはないから、実際どうかということとはなかなかわからない。そして自治会費は、たとえば 1 人年額 2,500 円としても、4,000 人の学生で 1,000 万円、4 学部だと数千万円という金になる。マンモス私大の自治会がさまざまなセクトの争奪戦の対象になるのは、何といてもこの軍資金の魅力が大きい。

この年のように、セクト間の内ゲバが激しくなると、自治委員選挙などもおちおちやっておれないし、学生の方もそんなことには無関心であ

る。そこで自分の大学の学生だか何だかわからない自称選挙管理委員が「学生証番号1番と2番の人お願いします。いいですね」と一方的に指名して、さっさと引き上げてしまったりする。学生大会も、教員がのぞいてみたら40人そこそこの人数なのに、教授会への報告は「出席161人、委任状350人」で成立とある。わが経済学部自治会の規約では、大会の成立は「常時登校数」（慣習的に全学生数の1/3）のそのまた1/3という“戦闘的”なものになっている。

その自治会とのわたりあいに返ろう。直接のやりとりでも、夜な昼なの電話でも、「命が惜しければ」、「月夜だけじゃないぞ」、「首がとぶぞ」、「何をするかわからない」、「全面対決の覚悟をせよ」である。「それが自治会の役員が学部長に言う言葉かね」というと、「と言いたくなる」とか「そういう意見もある」と、ちょっと和げるが、何しろ実績があるからこわい。

このころ、キャンパスでは、よく烏打ち帽にマスクをした得体の知れない男が門の近くをうろついていた。学生でありながら、こういうあいに学生証を調べられ、所持品を検査され、はては学生会館につれこまれて、3時間にわたり日誌や手帖の内容について尋問されたり写真をとられた例もあった。女子学生で学生証を見せると強要され、こわくて大学へ行けないというもいた。ちょうどこの年、国会で共産党議員が7校の大学で学生が登校できない問題をとり上げ、とくに法政についてはそういう学生が109人いるということで、文部省の学生課からその実状と対策をくわしく報告してくれと言ってきた。

三番目の学費問題だが、この年はそろそろ学費値上げが出そうな年だった。学費値上げの権限はいうまでもなく理事会にあるが、直接矢面に立つのは学生に日常的に接触している教員であり、とくに教学優先を看板とする法政では教授会での論議が不可欠である。石油ショック後の狂乱物価もあり、いずれ値上げせざるをえないのはわかっているが、問題は上げかたである。

この年の6月ころ、経済学部から出ているS財務理事に聞いたところ、「値上げの意志はない」ということだった。ところが、10月の半ば過ぎの学部長会議で他大学と比較しての財政状態の資料が配られた。そしてその次の週財務理事からの説明があった。年末も近いというのに、抜き打ちといってい出し方である。

だが、中小企業じゃあるまいし、天下の公器である大学が赤字だから値上げをするなどというお粗末な話では困る。学費問題は国庫助成問題と同様単なるカネの問題ではない。そのカネでどういう教育研究が支えられるのかという教学問題である。これからの法政をどうして魅力ある大学にしていくのか、悪名高いマスプロをどのようにして解消するのか、学生が入構できない「閉ざされた」大学をどうしたらいいのか、それと関連して自治会費の代理徴収制度は今のままでいいのか、などといった今後の展望を欠いた学費値上げでは、一時のごまかしでしかない。

それから、学生対策的発想が先に立って、抜き打ち発表一逃げ切りでは大学にあるまじきやり方である。早いうちから財政状況をあからさまにさらけだし、今後の大学改革の展望を含めて、学生と語りあい、わたりあうべきである。学部長会議での話その日のうち学生に伝わるという現実はあるにしても、10月半ばも過ぎて学部長会議に財政状況を出すというのはいくらなんでも遅すぎる。S財務理事は翌年の任期満了で理事をやめる意向であり、財政状態を少しでも楽にして次に申し送るつもりらしいが、そうはいかない。

教授会に諮って今回の値上げは見送るべきだと申し出た。S財務理事は自分の出ている学部の反対で値上げが通らなければ、教授職をも辞任するかもしれない。そうなるならこちららも辞めよう。刺し違えもやむをえない。Sさんが辞めずに値上げを延ばすなら、来年は経済学部から学生部長を出す番だから、自分が学部長をやめて学生部長をやってもいい。機動隊依存でなく、正面から学生と1年間でも2年間でもわたりあおう。

こんなにまで思いつめたのだが、結局のところ、つぎのような理事会へ

の申入れを行なって、値上げについてはやむをえないものと了承することにした。

- (1) 全学の衆智を集めて今後の大学改革の方向を明確にすること
- (2) 学費改訂についてはとくに理事会と教学側との十分な意志疎通の上
にこれを行なうこと
- (3) 補欠入学金を明年度より廃止すること
- (4) 学内奨学金制度を充実すること
- (5) 全学を挙げて抜本的な国庫助成運動に取り組むこと

この申入れで実現したのは、理事会がすでにその意向であった第3項目だけで、あとはその後の経過を見るとまったく棚上げになっている。

12月に入って、初年度の学費で60~70%増、4年間の合計では約2倍という大幅な学費値上げ案が発表された。これに対し学生の事務室封鎖が行なわれるや、大学では待ってましたとばかりロックアウト一冬休みの繰り上げという措置をとり、本番は休み明けに持ち越された形となった。年が明けての授業で、私はスタンダールならぬ赤と黒のヘルメット部隊につかまり、2日にわたって吊るし上げを受けた。このあと“総長団交”，ついで校舎の占拠と破壊，ロックアウトから期末試験のレポートへの切り替えとなったのである。

この“総長団交”は実は総長の身の危険や機動隊導入を招かないようにと、幕切れを大学とセクトが事前にしめし合わせた“セレモニー”だった。学生側のリーダーは先に出てきたO君だったが、私との自治会費問題での折衝のさい、「オレが学費団交で全学のセクトをまとめてやったのに……」と手柄顔でひけらかすといういたらくである。

学部長の任期は2年となっているが、中核派とさんざんわたりあつてのストレスのせいか、十二指腸潰瘍になってしまい、1年だけでやめた。この年凍結した自治会費は翌年度になって遡って支払われてしまっている。前述の芝田進午さんは私と自治会費不払いを約束したということだが、社会学部でも同様次年度の学部長が前年度の分も払ってしまった。芝田さん

はこれに憤慨、広島大学へ移ることになる。

この春は高校の学習指導要領改訂の関係で大学受験者が激増、経済学部は1万7,000人をこえた。入試の採点が合格発表日に間に合うかどうか、ハラハラした記憶がある。

おわりに

中野正先生は法政を65歳の定年でやめられて、ある短大の学長になられたが、その後不慮の事故のため亡くなられた。先生への追悼文で、私は「学問や識見などでは先生に及びもつかないが、この点（65歳で退職）だけはぼくも見なうことができるのではないかと思う。あと3年、そうした道を模索したい」と書いたことがある。それが、水俣大学設立という思いがけない仕事にとりかかったため、65歳で法政を去る機を失ってしまった。水俣大学が予定通り1990年開学したならば、私は法政で1年定年延長ただけで水俣へ移ったはずである。

こうして、学生時代から半世紀近い法政生活となってしまった。この間、とくに教師になってからの35年の体験から見ると、Ⅰ部の学生よりⅡ部、Ⅱ部よりも通教、通教よりもモグリといった順に学ぶ意欲が強いように思われる。換言すれば、肩書から遠ざかるほど勉学の意欲が旺盛ということだ。それなら大卒なんていう肩書はなくしてしまったらどうだろうか。

大卒の肩書をなくすということは私のはじめて言い出したことではない。故梅根悟さんは卒業制度廃止論者で、日教組の教育制度検討委員会の委員長をなさっていたが、その第2次報告にもこの問題が出てくる。また社会党も同様である。最近自民党を離党した西岡武夫さんもそうで、1974年に発表された自民党の高等教育改革案でも、大学が学問探求の場ではなく、社会生活との安易な緩衝地帯となりがちな現状は改めるべきで、卒業という制度自体を再検討せねばならないと言っている。

1987年に出された女性による民間教育審議会（代表依萌子さん）の最終教育改革提言は、親が子どもの教育に責任をもつのは18歳までで、それ以上になれば、自分の学びたいときに自分の金で学ぶべきだとする。そして、企業などは大学に就職のあっせんを求めず、独自に公募すること、大学は学生の就職をあっせんしないこと、学歴・学校歴による差別をなくす「学歴差別禁止法」を制定すること、を提言している。

「21世紀の大学」といわれるスウェーデンの大学の入学には25-4という制度がある。25歳以上で4年以上の労働その他実務の経験があれば、フリーパスで大学へ入れる。学費は一切無償である。このため77歳とか86歳のおばあちゃん学生などのごくありふれた話で、ストックホルム大学では学生の1/5が65歳以上の年金受給者である。大学全体についても、25歳以上の成人学生が2/3を占めている。まさしく、生涯学習である。

昨年の5月、自民党からの要請に応える形で日本私立大学団体連合会と日本私立短期大学協会の連名による「私学助成に関する意見書」が出されたが、生涯学習の声が高い昨今なのに、そこでは、大学を専ら人材養成（と研究）の場ととらえ、上に見たような主体的な学びの場として考える視点はまったくない。今後の法政大学が青年たちのパスポート要求や社会の人材要求に唯々諾々として従うのではなく、ほんとうの学びの場を旨として着実な歩みを続けるよう切望したい。そうでなければ、今後の18歳人口減少のなかで、Ⅱ部・通教はその存在が危くなるし、Ⅰ部も学生の質の著しい低下は必然である。新学部設置をめぐる学内不一致で83年、88年と2度も総長を追い出すような醜態を今後も続けていたのでは、大学自体民衆に見放されてしまうことになるだろう。A. マーシャルのいう warm heart から出発して cool head で学びたいという人々を惹きつける universitas の再現のため、私も法政の外で余生の全力を傾けたいと思う。

それは、一つは前に述べた「学歴差別禁止法」を含む学歴社会の撲滅である。大学だけでなく、教育全体の再生のため、このことは何としてでも実現されねばならない。風車に手向うドン・キホーテと見られようと（実

際それに違いない), 私は志を同じくする人たちと学歴差別をなくす国民的運動に取り組みたい。

もう一つは一昨年からかかわりをもっている日本戦没学生記念会(わだつみ会)や平和遺族会、10年このかたかかわり続けてきたピースポートなどを通じての平和運動である。平和なくしては、学問も芸術もありえない。冷戦が解消して自衛隊も日米安保条約もその存在意義を失ったはずなのに、自衛隊の海外派兵、自衛隊法101条の改正と、私たちは「この道はいつか来た道」を歩みはじめている。そしてアジア2,000万、日本人300万の人命で贖った憲法第9条が累卵の危機に瀕している。憲法第9条こそ、今後の世界のありかたを指し示す指針である。

今日私たちの目の前にある南北問題と環境問題の深刻化は、マルクスの資本主義分析が正しかったことを証明している。J. ロビンソンが逆説的に言ったように、マルクス経済学はまさしく資本主義の経済学である。

この世に生あるかぎり、歴史の歯車を少しでも進めるような行動をしたい、21世紀の大学をめざして、ほんとうの平和の実現に向けて。

(1993. 11. 15)